
螺鈿の宝石箱

嘉月天空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

螺鈿の宝石箱

【Nコード】

N5365B

【作者名】

嘉月天空

【あらすじ】

名付け癖という奇妙な癖のある少女、長野藤花は、ある日骨董屋で螺鈿の宝石箱オルゴールを手に入れる。不思議な魅力を持つその宝石箱の蓋を開けると、宝石箱は異世界の伝説の物語を語り始めた――。

はじまり 1（前書き）

この物語は、とある作品の中に登場する概念を下敷きに作られています。ご存じの方であれば、当該箇所が出てきた瞬間ピンとくることでしょう（笑）

ですが、当物語の中には下敷きにした物語のキャラクターはもちろん、世界設定やら何やらの諸々の設定は登場いたしません。なのでファンフィクションとは言えません。その為、ジャンルを「ファンタジー」とさせていただいておりますので、ご了承下さい。

当然、該当作品を知らなくても大丈夫ですし、その作品とは物語があまりにかけ離れているので、作品名も出しません（完結後の後書きには書こうかと思いますが）。

私は、下敷きにした作品が大好きですので、パクリのつもりもファンフィクションのつもりもない事を、ここに断り書きさせていただきますました。

それでは、稚拙な作品ではございますが、お楽しみいただければ幸いです。

はじまり 1

（らでん 螺鈿の宝石箱）

高く澄んだ秋の空に、雲が浮かんでいた。

教室の窓と、体育館に切り取られた空は、それでも広く見える。

どこかから、遠く生徒の声がした。

ちょうど区切られた空の中央辺り。

太陽の近くにある雲が、オパール蛋白石のように煌いている。

五色の雲は、吉祥とされ瑞雲と呼ばれているのだと、以前母に教わった。

「綺麗……」

呟いて、息を吐く。

「ふじか 藤花！」

だから、そう呼ばれた時も、藤花はすぐに反応できなかった。

「何ばーっとしてるの！ 中二組、ながの長野藤花！」

可愛いと称するには、少々甲高すぎる大声で藤花を呼ぶのは、藤花の親友である桜井巴さくらいともえだった。

「ちゃんと聞いてるよ、巴」

そう言つて、空を指差す。

「ほら、あそこ。瑞雲ずいうん」

「ズイウン？ …… あ、綺麗！ アレ、ズイウンって言つんだ」

へえ、と巴が感心したように声をあげる。

「写真に撮つておきたいな」

あまりに綺麗なので、藤花がそう呟く。

「あたしは絵に描きたい」

巴は流石に美術部員らしい事を言う。

「コンクールに出す絵の構想、決まった？」

近頃、その事ばかり気にしている巴に藤花が尋ねる。

「それはまだ」

鼻の頭にシワを寄せて、巴が答える。

「それより藤花。今日先に帰つてて、部活の用事ができちゃってさ」

「いつ終わる？ 待ってるよ」

「あーうん、じゃなくて……買出しだからさ」

「ごめん、と巴が両手を打ち合わせて頭を下げる。

「ミスのハニーデップで手をつってあげる」

「言っと、巴が苦笑いした。

「本当にハマってるわねー」

「税込み九十四円でお手ごろリーズナブル価格でしょ」

「二〇八キロカロリーでエネルギー摂取も、とっても合理的リーズナブルね」

「ハニーオールファッションが好きな巴に言われたくない！」

巴と一緒に笑いながら、藤花は一瞬で鼓動の早くなった胸元を押さえた。

危うく、言ってしまうところだった。

ハニーデップの代わりに、別の名前を。

——キンロトウカ金露糖果。

藤花の中でその名前は、藤花の好きなドーナツの名前になっている。

藤花には奇妙な癖があった。それは、『名づけ癖』である。

例えば、今日の気分は『すがらのアルファルド』

例えば、今日の天気は『セイテンナミユキ青天波行』

例えば、今日の朝食は『クリア・ネイプルス』

それらは、どこからか降りてくるように藤花の中に居座って、頭から離れなくなってしまふ。

藤花の中ではその名前が絶対で、他にはどんな名前もありえない。

小さな頃は、自分の勝手につけた名前で呼んで大人たちを困らせていたが、最近はしていない。

それが奇妙な事だと、分かったから。

普通は、気分や、天気や、物に、自分で勝手に名前などつけないのだと分かったから。

それでもたまに、さっきのようについ口を衝いて出てしまいかける事がある。

それはおかしい事だと、分かっていたから。

——親友の巴にだって、言えるはずがないのだ。

はじまり 2

巴と別れて、藤花は市立図書館まで寄り道をする事にした。

元々、今日で図書の返却期限が切れるので、行こうと思っていたのだ。

小高い丘の上にある図書館には、急な坂道を上らなくてはいけな

い。
急角度をヘアピンカーブで緩やかにしている。

そのカーブの先端に、草木の茂った獣道のような小道がある。

よくよく見れば、土に埋もれた木の階段が見え、かつては整備されていたと分かる。

あまりに細いその道は、ともすれば見落としてしまうような暗く、目立たない道だった。

藤花自身、生まれてからずっとここに住んでいたのに、つい先日気付いたくらいだ。

木漏れ日が反射して硝子のように光るので『硝子ガラスの小道』と名づけた。

同時にそれは、触れれば崩れてしまいそうに微かな、別世界への入り口のようにも見えたからだった。

密かに胸を躍らせて小道に踏み込んだ藤花は、当然のようにがっかりとした。

『硝子の小道』は、ヘアピンカーブの先にある道に繋がっているだけの、ただの道だった。

「でも、近道発見、だわ」

そう呟いて自分を励ましたものの、実際には舗装のされない歩きにくいその道は、舗装された道を歩くよりも時間を要する。

それでも、丘の上の図書館に向かう時、藤花はいつもこの道を使った。

ただし、誰かが一緒の時には通らない。

ひとりきりの時、もしかしたら、違う道が開けるのではないかと期待して通るのだ。

「今日も、駄目」

当然の事を呟いて、藤花は嘆息する。

それから、何気なく周囲を見回した。

チカリ、とわずかな光が藤花の瞳を捉える。

「……何？」

目を細めて、藤花はそちらに向き直った。

藤花の視線の先にあったのは、道をはさんだ向かい側に建った、古ぼけてくすんだ家だった。

——否、家ではない。店、である。

木製の扉以外のすべての壁面を覆う、白茶けたシヨウ・ウィンドウの中から、藤花の瞳にちらちらと光を運ぶ物がある。

引き寄せられるように、藤花はシヨウ・ウィンドウの前に立った。日に焼けて黄ばんだ繻子サテンの中央に恭しく鎮座するのは、光沢のある木製の箱。

宝石箱が何かなのだろうか。

なぜか側面に穴が開いている。

蓋の部分には繊細な螺鈿細工らでんさいこうが隙間なく施され、見てみると眩暈すら起こるよう。

その螺鈿細工の部分が、光を反射していたのだった。

規則的な模様はひとつもなく、不規則に円環を描くように、螺鈿が配置されている。

吸い込まれるように中央に視線が行き、そこからまた放射状に細工が続く。

無造作に見えて、計算しつくされた配置。

じっと見ていると、何かの模様が読み取れそうで、けれどそれは決してつかまえられない、蜃気楼のように霧散する。

強いて言うならば、大極図に少し似ているかもしれない。

そう思って見ると、もう、そうには見えなかった。

『デューター・キー優しさの手がかり』

不意に、そんな言葉が藤花の脳裏を掠める。

……どうして？

と、この時に限って、普段は疑問に思わない自分の『名づけ癖』に問いかけた。

なぜ、自分は、この箱を見て「優しさ」なんて単語を思いついたのだろう、と。

藤花の見る限り、不規則な円を描くその意匠は、むしろ不気味で得体のしれない感がある。

そして同時に、強く心惹かれた。

目が離せない。

延々と、螺旋を描く紋様を追い続けてしまう。

“欲しい”という衝動的な感覚に押されて、藤花は店内へと踏み

込んでしまった。

はじまり 3

薄暗い店内には、照明すら置かれていない。

今が夜ではないかと思いたくなるほど、闇が濃い。

ガラクタのような壺や箱、ランプ アンティーク・ドール洋燈や骨董人形。

おそらくは、骨董品屋のつもりなのだろうが、雑多に物が積み上げられ、雑然とした店内の「骨董品」は価値があるかないかさえない。

その中で、あの箱だけがシヨウ・ウィンドウに飾られていたのは、藤花にとって幸いだったのかもしれない。

そうでもしなければ、きっとこのガラクタの山の中から、たったひとつの箱を掘り起こす事はできなかっただろう。

藤花が視線を走らせれば、その最奥に暗闇に溶け込んで、老夫がひとり座っている。

ぴくりとも動かないので、はじめは等身大の人形かと思ったくらいだ。

「……あの、」

老人は答えない。

「……あの、シヨウ・ウィンドウに飾ってある箱なんですけど……」

老人がほんの少し顔をあげて、藤花の方を見た。

「どうやって入った」

その低い声は唐突に聞こえて、藤花は思わずびくりと身をすくめた。

あまり暗い中で老人がしゃべったので、どこから声がしたのか、よく分からなかったのだ。

もしかして、まだ準備中だったのだろうか。

思い返してみると、入り口の扉にはろくに注意を払わずに入ってきてしまった。

準備中の札がかかっているにも、気づかなかったかもしれない。

だとしたら、老人にとって藤花はいきなり入ってきた不審者以外の何者でもない。

「すみません！ 私『テンドー・キー優しさの手がかり』が売っているのかどうかを聞きたくて……！」

あせって弁明の科白を舌に乗せきってから、藤花は、はっと口をつぐんだ。

「……テンドー・キー？」

老人が聞き返すのに、顔がほてるのがはつきりと分かった。

「あの……つまり、シヨウ・ウィンドウの箱を……」

きつと妙な中学生だと思われる。いきなり商品に名前をつけるなんて……。

「私、何でも名前をつけちゃう癖があつて、その、それで……」

「名前を、つけたのか？」

どうしてか、老人が驚いたように目を見張った。

やはり『テンダー・キ優しさの手がかり』は売り物ではないのだろうか？

そう思うと、逆にどうしてもあの箱を手に入れたくなった。

どうしても駄目なのか、尋ねてみよう、と藤花が思った瞬間――。

「――なら、」

老人が急に立ち上がる。

「これはお前に渡る運命なのだろう」

その手元には、『テンダー・キ優しさの手がかり』。

不可思議な意匠。

渦巻く紋様。

薄明かりの中で、当たる光すら緻密に計算しつくされたのだ、と言わんばかりに螺鈿細工が輝く。

受ける不気味な印象と、手に入れたという暴力的なまでの衝動も同一のもの。

あの箱と同じ物が存在するとはとても思えなかった。だとしたら、いつの間にあの箱は老夫の手元に現れたのだろう。

誘われるように前に進み出て、老人の手から『テンドー・キ優しさの手がかり』を受け取る。

「これは螺鈿のオルゴールの宝石箱だ」

「オルゴール？」

螺鈿の模様を見つめながら、そのまま聞き返すと、老人から肯定の返事が帰ってきた。

しかし、オルゴールにつきもののネジがつくような空間が、箱の下にない。

箱の外側は、完全な長方体である。

指でさぐると、側面に小さな穴があった。

そういえば、先刻シヨウ・ウィンドウを覗き込んだ時にも見た気がする。

これがネジの穴だろうか。

箱を横に向けて確認したかったが、すいつけられたように蓋の様から目が放せない。

「その模様が気に入ったか？」

老人はおかしそうに藤花に尋ねる。

藤花が何も答えないうちに、老人が続けた。

「その模様は永遠の螺旋を象徴している。はじまりもおわりもなくそこから出る方法はない。内に秘めた力は、正しい方法でしか使えない。いや、箱はただのきっかけでしかないのかもしれない」

箱に目を奪われている藤花には、老人の言葉は単なる単語の羅列でしかなく、まったく意味が分からなかった。

あるいは老人にしても、藤花に聞かせるつもりはなかったのかも
しれない。

「これで帰れるのか、いや、消えてなくなるのか。いずれにしろ、
自分で招いた事態だ」

声が聞こえたか聞こえなかったかのうちに、突然ボタン、と大きな音が間近でする。

驚いて顔をあげると、なぜか目の前に扉があった。

木製の薄汚れた扉。金の箔押しで文字が書いてある。

骨董品屋の、扉だった。

「——え、」

わけが分からず、取っ手に手をかけて、ガチャガチャと動かす。

けれど、扉は何をしても開かなかった。

いつの間に、扉の外に出たのだろう。

そんな事も分からないほど、箱に氣をとられていただろうか。

「……あ、お金！」

代金を払っていないと思い出し、あわてて扉をたたくが、応えはない。

藤花は、しばらく扉を叩いたり、呼びかけたりしたが、無駄だった。

「しょうがない……また明日来よう」

ふう、と息を吐き、藤花は仕方なくそう呟いた。

帰り際、横のショウ・ウィンドウを見る。

日に焼けて黄ばんだ繻子サテンの中央には、そこだけ日に焼けるのをまぬがれた四角い跡。

そこに、この箱が乗っていたのは間違いない。

もう一度、固く閉ざされた木製の扉を見る。

扉にはこう書かれていた。

——魔術師の城

なるほど、確かにあの老夫には似合いの名だ、と知らず藤花は微笑んだ。

はじまり 4

あわただしく図書館に本を返して、自宅まで一直線に帰る。

住宅街の一軒家。

「はすみ蓮見」と「長野」という二種類の表札の掲げられた家が、藤花の自宅だった。

「ただいま……」

父がまだ帰らないのを承知で、家の中に声をかける。

ただし、小声で。

そのまま足音を立てないように仏間に顔を出し、四年前に亡くなった母の写真にも帰宅を告げた。

藤花が十才の時母が亡くなった。

小学生のうちは、近所に住む伯母が家政婦めいた事をしていくれたが、藤花が中学に上がったからは、そういった家事のあれこれは藤花がやっていた。

でも、今現在、藤花が家事をする必要は、ない。

そのまま静かに自室に直行しようと踵を返した瞬間、台所の方から女性が出てきた。

「おかえりなさい、藤花ちゃん」

そう言うてにつこりと微笑むのは、檀^{だん}あずさという名前の女性。

藤花の父と、再婚予定の女性。

「ただいま帰りました」

視線を合わせず、会釈だけしてさつと立ち去る。

他人は「もう四年」というけれど、藤花にとっては「まだ四年」だ。

まだ、四年なのに――。

何事か言いかけたあずさを締め出すように、藤花は強く自室の扉を閉めた。

扉を閉めるなり、その場に座り込む。

制服のスカートから出ている素足の部分が、フローリングの床に触れて冷たい。

見上げれば、時計の指差すのは四時半。

巴と別れてから四十五分。

何時間も経ったと思ったのに、まだそれだけしか経っていないのか、と思った。

老夫と話して、『テンドー・キー優しさの手がかり』を見ていた時間はとても長く思えたのに。

手にしていた『テンドー・キー優しさの手がかり』を床に置く。

ぐるぐると渦巻く模様が、ことさら気味悪く見えた。

藤花の母は、病死だった。

藤花は未だに、母の亡くなった原因である病気が何なのかをよく知らない。

亡くなったその時に聞いたような気がするのだが、当時は原因なんてどうでもよかった。

けれど、今更父には聞けない。

父は、不自然なまでに母の死を口にしなかった。

父は、母の死に目に間に合わなかった。

親戚の間では、その事を随分悪しき様に言う人が多かったが、藤花は、それが誰より悲しかったのは父本人に違いないと思っていた。

その証拠のように、父は母の一周忌が終わると同時に、糸が切れたように体調を崩し、入院までしてしまった。

帰ってくれば、母が死んだ事を口に出さなくなった。

それも今から思えば、本当に母が理由だったのか分からない、と

皮肉気に藤花は思う。

父が、再婚相手であるあずさと知り合ったのは、入院したその病院だというのだから。

彼女は看護師として、その病院に働いていた。

人の顔色をうかがうように、父が再婚の話を藤花にしたのは二週間前。

藤花の答えは、「否」だった。

——まだ、四年なのに——。

けれど、彼らは藤花にはまだ母親が必要という大義名分を振りかざして、彼女は家にやってきた。

他人の弱みにつけこんで。

卑怯にも。

そんな人を、母だなんて呼べない。

ぎゅっと目をつむって、嫌な気持ちを追い払う。

光を反射して煌めく『テンドー・キー優しさの手がかり』を手に、ベッドの上に寝転がった。

留め金のついていたらしい跡があるのに、その時はじめて気付く。

元は綺麗な留め金がついていたのだろう。

金の瀟洒な細工の名残があった。

思いながら蓋を、開ける。

中は、空だった。

ただ、紅天鷲絨ベニコロネが敷詰められている。

「嘘……ネジは？」

どんな曲が入っているのかも聞けないのか、と藤花は嘆息する。

明日、例の骨董品屋に行かなくては。代金とネジと――。

内心で数え上げて、『テンドー・キー優しさの手がかり』の蓋を閉めようと、蓋に手をかけた。

その瞬間、『テンドー・キー優しさの手がかり』から音楽が零れ落ちる。

箱の表面に施された螺鈿のような煌びやかで繊細な音。

触れれば硝子細工のように脆く崩れ去ると思わせる音であった。

何も触っていないのに、と藤花が思うより早く、さらに驚いた事に音楽に乗せて女性の声が聞こえてくる。

伸びやかで、優しいメゾ・ソプラノ。

若い女性の声が、物語を歌いあげる。

—— ゆったりと、歌いあげた。

エマ・リンゼル 1

——私は東の果ての果て、雲を貫く山の上。

豊かな緑と水の元、ひとりの師夫しふに創られた。

螺旋で巡る円環の、言の葉語れと創られた。

内に秘めるは力の端は、外に魅せるは螺鈿はの細工。

手に手を渡りて力を与え、望み叶える自鳴琴じなりこと。

それが下界へ迷い出て、売られ売られて自鳴琴。

連れて行かれたその先は、南国屈指とその名も高き、

港町ベルーシカ！

空は青く晴れ渡り、海は蒼く澄み渡り、

カモメは騒ぎ、風に乗る。

活気あふれる湾の内、一艘の船がやって来る。

風をはらます帆は三つ、海を切って行く船の、船首にあるは
乙女の像。

その名を知らぬ者はない。海賊すらも恐れさす、南方諸島の
あきないせん
商い船。

その名も海の女神号！

陽に照らされるその甲板、ひとりの少女が立っている。

こがね
黄金色に焼けた肌。燃えるような赤髪赤眼。しやくはつしやくがん

その身にまとうは、高名な、海の民の証帯。

少女の名は——エマ・リンゼル

*

目抜き通りと言い切るには雑然としたその通りの別名は、盗品市
場という。

ベルーシカの盗品市場といえば、古今東西世界中で手に入らぬ物
はないと言わしめる、いわば巨大なブラックマーケットであった。

肥大した合法非法お構いなしの雑多な露天は、もはや国の法も

及ばない。

国が取り締まらない代わりに、ここには国の庇護もない。

代わりに諍いさかいがあれば、各々地区毎に分かれた「組合」の連中が飛んでくるといふ仕組みである。

むろん、穏やかな「組合」であるはずもない。

下手に首をつつこめば、命に関わる厄介な組合である。

日用品の買出しに出たエマは、そんな埒もない事を考えながら歩を進めた。

もちろん、考えことをしつつも警戒は怠らない。

懐のものであればまだ良い方。

若い女と見るや力ずくでと考える不埒者も少くない。

エマは慎重に、それでいてやり過ぎないように、買い物袋に隠れていた、腰に巻いた帯がよく見えるように位置をずらした。

地布が見えないほどびっしりと、色とりどりの糸で刺し子の入れた特徴的な帯は、一目見れば海の民のそれであると知れる。

海の民は生まれるとすぐに、産着に包まれ小船で海に流される。

子を流した両親は家に戻り、両親が家にこもったならばすぐに、他の海の民が子の乗った船を引き上げる。

これで子どもは水底の神に捧げられた事になり、男女の別なく神に愛され、海難に強くなるという伝統があった。

母親は子が戻ったら、その産着に家々に伝わる伝統の模様を縫い取り、それはその子どもが一生身につける海の民の証帯となるのである。

海の民は西国との貿易が始まってから、漁師や水先案内人よりも、商人としての面が強くなった。

それを嘆かわしいとする老人も多いが、エマは商人というのなかなか面白いものだと思っている。

西国との間に頻繁に船が行きかうようになると、その船に乗せられた荷を狙った海賊が増えた。

元々喧嘩早く打算的な民族性。

商人でありながら、他の商船の護衛も請け負いだしたのである。

そもそも船を操るのが巧みで、腕っぷしも強い。

下手な海賊に負けようはずもない。

そのため、海の民というと喧嘩が強い、という噂がまことしやかに流れた。

事実、エマも船でも指折りの実力者である。

ただし、余計なめめごとに巻き込まれたくない、とわざと帯を見せびらかして歩いているのだ。

エマ・リンゼル 2

「おう！ エマー！！」

突然、後ろから野太いダミ声をかけられる。

声に振り返れば、案の定エマと同じ海の女神号に乗る大男の、ザマイがいた。

腰には帯。彼も海の民である。

「なんだよ、それ」

ザマイが担ぎ上げた布につつまれた大きな塊を見て、エマが声を上げる。

「さあな、知らん。アギのジジイからの頼まれモンだ」

「アギのジイさんが？ また新しい火薬じゃねえだろうな、あの爆薬狂いめ」

「で、エマ。おめえはもう船に帰るのか？」

「ああ、買いたい物は大体買ったしなア」

言ってザマイに買い物袋を見せ、それからぐるりと辺りを見回す。

ちょうどこの辺りは古臭いものを売る——要するに骨董品街だ。

こんなところに用もないと、視線を下げると、露天の親父と目が合う。

親父が卑屈に笑うが、視線はエマとザマイの腰帯である。

海の民の帯は、貴重品だと高く売れるらしい。

むろん、海の民にとって守り帯でもある上に、海の民という所属を表すいわば身分証明書である。

売り物には絶対にならない。

さてこの親父もその手合いかと、嘆息し。

エマは視線をさらに下にやる。

汚い布に並べられた中に、蓋に小綺麗な細工のある箱があった。

側面に螺子がついている。オルゴール自鳴琴だろうか。

「おい、親父。そいつも売りモンか？」

尋ねるエマに、ザマイが眉をしかめる。

大方、ろくでもない買い物をするなどでも言いたいのだろう。

「へえ、この箱ですかい。オルゴールこいつは自鳴琴のついた箱だね。お客さん目が高い！」

「実アな、姉さん連中に土産を買わなきゃなんねえんだ。こいつは

いくらだ？」

「十でさア、海のねえさん」

にまにまと親父が笑って、両手を広げた。

「そりゃ、西国硬貨でじゃねえだろ、もちろん？」

西国は南国に比べて、総じて物価が高い。

自然、金の価値もはねあがる。

「そ、そりゃあもちろん、タンザ金貨ですぜ！」

「タンザ金貨ア？ 冗談じゃねえぜ！」

大声を上げたのはザマイの方だ。

「そんな薄汚ねえ箱、タンザ銅貨十枚がいいところだぞ。エマよ、あっちの店でもっと綺麗な箱が売ってたぜ」

タンザ硬貨はこの辺りで使われる事の多い硬貨で、西国硬貨よりも価値の低い、細かい単位の硬貨である。

西国硬貨一枚で、タンザ金貨十枚。タンザ金貨一枚は、タンザ銀貨で十枚、銅貨ならば百枚だ。

「そんな旦那、タンザ銅十だなんて無茶な！ 酒の一杯も飲めやしませんぜ！」

露天の親父が悲鳴をあげた。

確かに、タンザ銅十では、子どもの小遣いにしかない。

「じゃあタンザ銀十でどうだ、親父」

エマがそう声をかける。

人が一日食えるか食えないかの額だ。

汚い箱にはつけすぎの値段だろう。

「おい、エマ！」

「じゃあタンザ銀で十！」

ザマイの声にかぶせて、これ以上安くされるものかと——大方、これ以下だと仕入れ値を切るのだろう——親父が叫ぶ。

「ほらよ、」

言つてエマは露天の親父に銀貨を放り、箱を持ってさっさと歩き出した。

「おい、エマよ！ そんな汚ねえ箱やめとけよ」

慌てて追いかけてきたザマイが声をかける。

「ンだよ、ザマイ。わざと芝居してたんじゃないのか」

呆れてエマがそう言った。

「あ？ 何の事だ？」

「この箱だよ。あの露天の親父も価値が分かってなかったみたいだったけどな」

そう言つて、箱の蓋を布でぬぐう。

蓋にほどこされた装飾が煌いた。

「よく見てみるよ！ こいつは東国の貴重な螺鈿細工だ。モノが少なえから、西のご婦人方はいくら払ったって欲しがる。西国硬貨で十……いや、持っていくところを間違えなけりゃ百……あるいはもつとか……」

ザマイが滅多に目にしないような高額を聞いて、目を白黒させる。それをたかだかタンザ銀十で買ったのだから、詐欺もいいところだ。

「船に帰ったら目利きの奴に見てもらおうぜ」

にまりとエマが笑う。

エマ・リンゼル 3

「ああ、確かにこりゃあ螺鈿細工だよ。しかも相当の職人技だ。儂もここまでの細工にお目にかかったのは、初めてよ。いいモン見つけてきたなあ、エマ」

綺麗に禿げ上がった頭を撫でて、船一番の目利きであるキスルが請け負った。

「やつぱりな！ 前に見た事あったからよ、そうじゃねえかと思つてたんだ！」

「やったなエマ！ これで浴びるほど酒が吞めるぜ！」

ザマイの科白に、エマが眉をしかめる。

「冗談じゃねえぞ、ザマイ。誰がお前に酒なんざおごるか！ ウワバミのてめえに吞ませたら、金がいくらあつても足りねえ！」

しかしザマイは、そんな科白は聞かないふりをして、代わりに調子外れの歌を歌いだした。

「偶然見つけたボロい箱で俺らは大もうけ」

螺子を巻いて蓋に耳を近づけ、何の曲が入っているのか調べていたエマが、蓋を閉めてザマイの足を蹴り飛ばす。

「ったく、何の曲が入ってんだか分かんねえじゃねえか」

「ははは、すまんすまん」

改めて、蓋を開く。

『偶然見つけたボロい箱で俺らは大もうけ』

「おい、ザマイいい加減にしろ！」

「い、今のは俺じゃねえぞ！！」

エマの怒鳴り声に驚いて、ザマイが慌てて弁解した。

「おい、エマよ。今のザマイの歌はこの箱から聞こえたぜ？」

キスルまでが言うのに、エマも眉をひそめた。

「どういう事だよ？」

閉じた箱の蓋をもう一度開く。

何の変哲もない木の板が見えた。

先刻とまったく同じに、ザマイの調子外れな歌声が流れた。

「……まさかよお、エマ。音を覚える^{オルゴール}自鳴琴^{オルゴール}なんぞ、儂あ見た事も聞いた事もないぜ？」

キスルが頭を抱えて言うが、エマやザマイも同様だ。

^{オルゴール}自鳴琴^{オルゴール}なぞには滅多にお目にかからないが、それでもこの^{オルゴール}自鳴琴

が妙なのはよく分かる。

オルゴール
自鳴琴というのは――エマたちの認識では――螺子をまわすとな
よなよした曲を流す箱で、それを聞くと西国の奥様方が大喜びする
モノだ。

決して、ザマイの調子外れの戯れ歌をもう一度流すようなもので
はない。

オルゴール
そうだ、自鳴琴というのは流れる曲が決まっているのが普通で、
間違っても声なんてものは聞こえるはずがない。

「思ったよりもずっとたいしたモノじゃねえか、西国硬貨百どころ
じゃねえ、こりや高く売れるぜ」

「おい、エマよ。やめとけよ、こんな気持ち悪い箱捨てっちまえよ
……こりやあ悪魔が取り付いてるに違いねえぜ。商いの神さんが怒
っちまう」

喜ぶエマとは正反対に、ザマイは及び腰だ。

自分の声がただの箱から聞こえてきたのがよほど気味が悪かった
らしい。

むっと柳眉を逆立てるのは無論エマである。

「何怖気づいてやがる。ここまで来て、こいつを売り払わない方が
商いの神さんが怒っちまわア！」

言って汚らしい紙の切れ端に、混ぜ物の多い悪いインクで、何事

か書き付けた。

——この自鳴琴^{オルゴール}は、螺子を巻いて蓋を開け、そこで聞いた音を覚える。聞く時は蓋を開けりゃいい——

南国言語で書いたソレに続けて、適当に憶えただけの西国言語で同じような事を書き綴る。

エマたちは商人だが、西国の人間が対等に接してくれているわけではない。

海の民よと蔑む者が圧倒的に多いのが現状。

となると、西国の商人を通しての商売が多くなる。

商人たちは、海の民の運ぶものの価値を分かっている。

だが、それは必ずしも対等に接しているという意味ではない。

隙あらばと騙す者もいる。

そのために、と西国言語を聞きかじりで覚える者は多い。

実際、西国言語は使えた方が便利なのだ。

例えば、西国の貴族の門前で南からの珍品と声高に物売りをすれば、興味を持つ貴族もいる。

もちろん西の商人を介さないために、得る金額は多い。

珍しい品をそうした方法で売る者は少なくない。

無論、リスクもある。

プライドばかり高い貴族は、売り物を手にしても金を払わない性質の悪い者もいる。

そこを見極めるのも、商人の資質である。

エマも、オルゴール自鳴琴を貴族に直に売るつもりであつた。

買い叩かれないように、と箱の表面を拭いて綺麗にする。

幸い、目立つ傷や破損はない。

先程書き付けた紙をオルゴール自鳴琴の中に入れ、油紙を何枚も使い、嚴重に包みあげる。

最後に布をぐるぐると巻きつけて、緩衝材代わりにし、仕上げに、と麻袋の中につっこんだ。

エマ・リンゼル 4

数日後、海の女神号は他の商船の護衛船としてベルーシカを出港した。

帆を高々と掲げ、一路西国カラル・ベラルの港へ。

西国と南国とを經由するルートは二つある。

大雑把に言えば、陸路と海路だ。

南国で最も栄える地が王都でなく、ベルーシカをはじめとする南方諸島であるために、険しい山裾と、広大な砂漠を越える陸路よりも、海岸沿いを進む海路の方が栄えている。

ただし、海路には海路で危険がある。

ことにこの季節、世界を支える柱であるとされる霊峰ガラディオ山脈から吹き降ろす風は、帆船を外海へと押し流す。

外海から離れたところに、海の民が竜の吐息と名づける急激な海流がある。

その海流に乗ったが最後、生きて帰れないと噂される化物海流である。

海の民の子どもなら誰もが知る戯れ歌に、海流を歌った歌がある。

ガラディオの肩に凶星が光る。

気をつける、気をつける。

竜の顎はすぐそこだ！

逃げろ、逃げろ、逃げろ！

竜の牙につかまりや最期。

水底の神さんが待ってるぞ。

逃げろ、逃げろ、逃げろ！

ガラディオの西側に。

東に向かえば命はない！

「……凶星だア！！ 凶星が出たぞ！」

裏返った声で、見張りが叫んだ時、エマは即座に寢床を飛び出し、甲板に駆け上がった。

「凶星だ！ 凶星が出た！！ 流されちまってる！」

見張り台に上った見張りが金切り声を上げる。

陸地に沿って移動するので、夜には帆をたたみ、錨を降ろす。

ガラディオオから吹き降ろす強風は、引き潮や離岸流とあいまって、知らぬ間に船を陸地から引き離してしまふ事がある。

あたりの船員も真っ青だ。海に生きる彼らは、化物海流の恐ろしさを知っている。

エマは船のふちに飛びついて、ガラディオオ山脈の方に眼を凝らす。

——見えない。

そのまますると索具に昇ると、ようやく赤い不吉な星がガラディオオの肩すれすれに見えた。

風が強い。

髪が吹き散らされて、初めてじかに見る凶星に、エマはぞっとして息を呑んだ。

戯れ歌が頭をよぎる。

ガラディオオの肩に凶星が光る。

気をつけろ、気をつけろ。

竜の顎はすぐそこだ！

ランプをかざした船員が、せわしなく商船と合図を送りあっている。

エマも、索具を滑り降りて、忙しく動き回る船員に加わった。

逃げろ、逃げろ、逃げろ！

竜の牙につかまりや最期。

水底の神さんが待ってるぞ。

「嵐が来るぞ——ッ！！」

誰かが——おそらく見張りだろうが——叫んだ。

背筋が冷えた。

それは多分、エマだけではない。

「西だ！ 雨雲が広がってきやがる！」

逃げろ、逃げろ、逃げろ！

ガラディオオの西側に。

東に向かえば命はない！

振り上げば確かに、星空を遮る黒い何かがそこにある。

今更のように風が湿っている事に気付いた。

凶星に気を取られすぎていた――。

思ってエマは、下唇を噛む。

前には嵐、後ろは海流。

「負ける、もんか」

エマが呟く。

小さすぎるその声は誰にも届かなかったが、エマの決意そのものだ。

「負けるもんか。こんなところで死ぬもんか！ 全員無事に、生き残ってやる！」

ザアア、と雨雲の先端が海の女神号に水を降らせる。

雨にかすむ視界に凶星を睨みつけて、エマが叫ぶ。

「アタシが、全員無事に、生き残らせてやる！！」

ガラディオオの肩に凶星が光る。

気をつける、気をつける。

竜の顎はすぐそこだ！

逃げろ、逃げろ、逃げろ！

竜の牙につかまりや最期。

水底の神さんが待ってるぞ。

逃げろ、逃げろ、逃げろ！

ガラディオオの西側に。

東に向かえば命はない！

セイ・デイルナーク 1

昨晚の嵐は酷かった。

難破した船もあつたらしいと聞いた。

山から吹き降ろす風を背に、セイ・デイルナークは海辺を歩いて
いた。

「その金髪の兄さ——ん！ 嵐の後に海のそばなんざ歩いち
やいけねえよ！ 水底の神さんにさらわれっちまうよオ」

遠くから、浅黒く肌の焼けた男がセイに声をかける。

南訛りの強い西方言語だ。

目に鮮やかな飾り帯からして、海の民だろう。

「わざわざ、ありがとうございます！」

言つて了解の合図に大きく手を振る。

了承の証拠に、先刻より海から離れて再び歩き出す。

難破したという船の破片が、大量の木の板が浜辺に散つていた。

他にも流木やら、強風に飛ばされたのか砂でぐしゃぐしゃになつ
た衣服やらが散らばっている。

昼にはこの町を発つので、記念に貝殻のひとつでも拾って行こう
と思っていたのだが、嵐にかき回された浜辺は貝殻を探すところでは
ない。

東国で待つ婚約者に、そんな物しか贈れない自分も口惜しいが、
それすら見当たらないかと嘆息した。

セイは西方の薬師である。

以前珍しい薬草があると聞き、東国に行った際に、かの国の自鳴^{オルゴ}
琴職人の娘と結婚を約した。

三年したら帰ると行って西国に戻り、薬の勉強をして今年が約束
の三年目。

セイは東国に向かう途中なのである。

カラル・ベラルの港へ行けば、南国に向かう船が出ている。

南国からは、ガラディオ山脈に並ぶ世界の屋根、シーニヴァール
山脈のふもと、ガルシアの街道を行けば東国である。

このニイベの町から半日行けばカラル・ベラルに着く。

カラル・ベラルは整備された港町だ。

西国の土産にと貝殻のひとつも拾うならば、これが最後の機会だ
った。

「美しい海の貝殻を持ち帰ってあげたかったが――」

嘆息交じりに呟く。

セイの婚約者は生まれて一度も山を降りた事がなく、海を見た事がないのだという。

珍しい貝ならばよい土産になるし、器用なああの婚約者の事だ、その貝殻で髪飾りでも作れるかもしれないと思っていたのだが――。

胸中で思いつつ、歩いていたセイは、ふと海の上に何か浮かんでいるのに気付く。

引き寄せられるように、浜辺にす――と寄ってきたのは、小汚い麻袋のようだった。

足首まで海に入って、袋を引き上げる。

妙に重いのは、布が水を吸っているせいらしい。

汚らしいその袋が、何となく気にかかり、見つからない貝殻の代わりに宿に持ち帰った。

宿に戻ってから改めて麻袋を見てみる。

使い古したようにぼろぼろなのは、元かららしい。

口を荒縄できつく縛り上げてある。

苦勞してそれを解くと、中には大量の布が入っていた。

一応出してみると、布の中に何か固いものがある。

ぐっしよりと濡れた布を取り払うと、油紙に包まれた箱のような物があった。

相当嚴重に封をしてあつたのだろう。

外側の油紙の数枚は水に濡れていたが、肝心の箱には水の一滴もかかつていなかった。

取り出して見れば、瀟洒な細工の宝石箱のようだった。

開ければ、螺子と小汚い紙きれが入っている。

「自鳴琴オルゴールなのか……？」

紙切れには何事か文字が書いてある。

乱雑な字で書かれたそれは南方言語のようで、セイには読めない。

その下に、大分綴りを間違えた西方言語でも文字が書いてあつた。

それもいわゆる庶民語と貴族の隠語が混じって読みにくい。

「これ……音出る……櫃ひつ？ 捻じ巻く。双空ふたける。しからば……え
っと、これは音色、の意味か？ ……記き、これは……奥おく？ 耳すま
すと、双空ふたける。聞こえる……？」

意味がよく分らない。

これを書いた人物は、おそらくちゃんとした教育を受けていないのだろう。

仕方なく、南方言語の方を見る。

セイは南方言語を知らないが、南方言語と西方言語は単語や意味、語順が似通っていると聞く。

そう考えつつ見れば、何となく意味が取れなくもない。

片言の西方言語と、うまく読めない南方言語を何とか読み解き、セイは苦心して紙切れに文字を書いた人物が言いたい事の大体を理解する。

「つまり……この箱は自鳴琴^{オルゴール}だが、螺子を巻いて蓋を開けるとその場の音を記憶する、記憶した音を聞きたければ再び蓋を開ける……という事だろうか？」

論より証拠、とセイは自鳴琴^{オルゴール}の蓋を開けた。

先刻は紙切れを取り出しすぐに蓋を閉めてしまったのだ。

蓋を開けると、おもむろに訛りの酷い、野太い男の声が聞こえ始めた。

音はめちゃくちゃだが、一応歌のようだ。

早口な上にテンポの狂ったそれは、何を言っているのかさっぱり分からない。

「これは凄いな……」

婚約者のところにいた時でもこれほどの自鳴琴オルゴールは見た事がなかった。

感心して自鳴琴オルゴールを、ためつすがめつ見回す。

蓋の意匠は円だろうか？　ぐるぐると渦巻く模様は、引き込まれ
そうで面白い。

珍しい自鳴琴オルゴールに喜ぶ婚約者の顔が見えるようで、セイはよい土産
になったとほくそえむ。

セイは昼になると、拾った自鳴琴オルゴールを手に、カラル・ベラルの港に
向けて出発した。

セイ・デイルナーク 2

「悪いね、兄さん。この間の嵐で棧橋が壊れちまってな。修復が終わるまで船が出せねえんだ。宿でも取っといってくれ」

カラル・ベラルの港についてすぐに言われたのはそんな言葉だった。

「いつ頃直りますか？」

「さあね」

にべもない回答に、嘆息する。

仕方なく、言われた通りに宿を取った。

船が出港できないとあつて、宿はどこも混み合っていた。

セイがなんとか滑り込んだのは、青いカモメ亭という食堂兼宿屋。

一階を食堂、二階を宿にしているらしい。

大通りから数本奥まったこの宿は、四軒目の宿を断られた時に、宿の主人が教えてくれた宿だ。

もつとも、宿屋とは名ばかりで、連れ込み宿の意味合いが強い。

そついった宿の中でもまだマシな方だから、と教えられた。

値段も良心的で料理も美味しい。

これに暖かい寝床があるのだから、これ以上言う事はない。

不意に暖炉の近くがにぎやかになる。

何事かと見てみれば、リダールという西国の弦楽器を抱えた吟遊詩人がいる。

「さあて、皆様、どのような話をお望みか？ 東国の山奥に住むという仙女の話？ はたまた西国の果ての果てに住む異端の呪術師の話？ 南国の宝玉と称えられた島に眠る財宝の話？ それとも、北国の媼おきなが伝える神話の英雄の話？」

芝居がかって詩人が言えば、店中の客がやんやとはやし立てる。

「西国のギラントール遠征のウルリーケ王子の話は？ 南国の暴君ヴァルク王の話は？ 東国屈指の貴族の悲恋の話は？」

吟遊詩人が問いかければ、誰かが「お貴族さまなんざクソ喰らえ！」と叫んだ。

店内がわつと盛り上がる。

「北国の話を！」

大切に持ち歩いていた自鳴琴オルゴールを、油紙から取り出しながら、セイが叫ぶ。

せめてこの吟遊詩人の話を婚約者への土産にしようと考えたのだ。

——ならば、自分の話す事のできない北国の物語を。

セイのその声は、不思議と店内の喧騒を越えて、吟遊詩人の耳に届いた。

「では、北国の英雄の物語を！」

言って、吟遊詩人がリダールをかき鳴らす。

北を切り開きし、偉大なる初代テルニダ王の時代。

王都からほど近い小さな村に、ひとりの少年が生まれました。

何の力も、何のとりえもない、ごく普通の少年でした。

ある時、北国に魔の者が現れ始めました。

人間が絶望した時に、暗闇から生まれ出る。

血肉を喰らい、国土を嚙下^{えんか}する。

闇よりも、海よりも、漆黒よりも暗い者。

甲殻類をつなぎ合わせた外見に、目鼻すらないただ口だけがぱっくり開いたその姿。

剣も効かず、弓も効かず、槍も効かず、拳も効かず。

人々は恐れ逃げ惑い、対抗する手段すらなく蹂躪され、人々が悲嘆にくれる中。

少年が立ち上がりました。

ひとり助け、ふたり助け。

助けても助けてもまだ助けを求める声が聞こえました。

ただの少年が、己の力だけで魔の者を討ち果たしました。

武器はただひとつ、その身だけでした。

けれどそれは打たれても倒れず、なぎ払われても立ち上がり、血を吐いてもあきらめませんでした。

北を切り開きし、偉大なる初代テルニダ王の時代。

王都からほど近い小さな村に、ひとりの少年が生まれました。

何の力も、何のとりえもない、ごく普通の少年でした。

けれどそれは打たれても倒れず、なぎ払われても立ち上がり、血を吐いてもあきらめませんでした。

武器はただひとつ、その身だけでした。

けれど、善い者が力を貸しました。

神々が力を与えました。

少年は、誰もが失くした希望を胸に、戦い続けました。

少年は、ついに、魔の者をこの世から消し去ったのです。

それは遠い遠い昔から、どこの国でも語られて、どこの国でも一笑に付される、ただの伝説でした。

ただの人から生まれでて、闇が消えると同時に消え去る、ただの伝説でした。

夢幻の類とされ、目をつむった闇の中にしか存在できず、目を開ければ消えてしまう、そんな伝説でした。

絶望の中に希望を見だし、誰もがあきらめてもあきらめず、ただそれだけで地に倒れず、だからこそ誰にも存在を信じられない、そんな伝説でした。

それは物語の中の存在。それは子どもだけが讃える存在。

後になれば誰も信じず、後になれば誰もが笑い。ただ子どもだけが知っている。

そんな伝説でした。

少年は、伝説になったのです。

セイ・デイルナーク 3

語り終わった吟遊詩人に、側にいた船乗りが文句を言う。

「おいおい、そんなお上品なのじゃなくてよ」

「そうだそうだ、そんなつまねえ話はやめだ！ そうだ、ヴァルク王の話にしるよ！」

はやし立てる声に、吟遊詩人の同意の音が響いた。

リダールが鳴る。

「南国の暴君として悪名高いヴァルク王！ それを影で操る者がいる事はご存知か？」

「当たり前よ！ 悪女バキタ王後の名前を知らない奴アいねえ！」

「そう！ ヴァルク王の側室でありながら、王后と名乗るバキタといえは稀代の毒婦！」

と、吟遊詩人。

間をおかずにセイの隣にいた男が声を上げた。

「そうだそうだ！ ヴァルクの犬どもはそんな事はねえ、とわめきやがるが、誰でも知ってらア！」

「おい、うるせえぞ、黙って聞けねえのか！」

別の者が怒鳴る。

声の途切れた一瞬の間を突いて、吟遊詩人が語り出す。

「では、そのバクタ王后に背き、殺された哀れな宮廷絵師の話をしよう」

吟遊詩人の指が、弦を爪弾いた。

絵師は、ミーザオルあたりで名の知れた絵師でした。

彼の絵がバクタ王后の目に留まり、宮廷絵師として召抱えられました。

不運な——そう、とても不運な事に彼は大変な美青年だったのです。

絵師を宮廷へと召し上げたバクタ王后は、絵師を誘惑しました。

バクタ王后は妖しの術を使い、正室に王子ができない事を知っていたのです。

第一王子を産んでいたバクタ王后は、正室側室限らず、第一王子を次王にするとヴァルク王に約させ、次代の国母の地位を固めました。

欲しいものは何でも得てきた王后は、今度は美しい若者との戯れを望んだのでした。

しかし、絵師には愛する妻があり、彼は最後までバキタ王后を拒みました。

王后は怒り、絵師にあらぬ罪を着せ、処刑を行いました。

その処刑法というのが、後々までの語り草になるような残酷極まりないものでした。

まずは絵師の足の爪をはぎ、手の爪をはぎ、手足の皮をそぎ、肉を焼き、骨を砕きました。

両手両足を切り落とし、犬に喰わせました。

けれど、何より残酷な事に、バキタ王后は絵師の美しい顔には、毛一筋の傷すらつけさせなかったのです。

絵師の苦痛にゆがむ顔を整え、死に化粧を施し、体は野に打ち捨てて野獣に喰わせ、首を銀の盆に載せ、妻の元に送り返したのでした。

哀れな絵師の妻は、夫の首を抱え、海に飛び込んでしまったという事です。

語り終えた吟遊詩人が不意に声をひそめる。

「このようにバキタ王后は気が多くていらっしゃる。バキタ王后の
実子、ジオール殿下には黒い噂があるのです」

吟遊詩人はあたりを見回し、殊更に声をひそめた。

「——かの、王子は……そう……ヴァルク王の——お子ではないの
ではないかと！」

ふつと息をつく。

「時の大臣、貴族デアグロ閣下におかれては、豪華な金の髪でいら
っしゃる。西の血が混じっておられるのです。ヴァルク王の髪は漆
黒、バキタ王后も、褐色の肌に黒い髪でいらっしゃる。ジオール殿
下のご容貌は——？」

「褐色の肌に金髪だ！」

誰かが叫んだ。

「ヴァルク王はバキタ王后にまるめこまれていらっしゃる。王を悦
楽にひたらせ、政治から遠ざからせ、デアグロ閣下に全権を移し、
王は王后と臥所で戯れられる。ヴァルク王は、ご自分の息子もお分
かりにならないほど、目がくらんでらっしゃる！」

「そつえば、俺もこんな話を聞いたぞ——」

吟遊詩人の近くにいた男が、やはり小声でそう言った。

「——そのな、俺の馴染みの女の知り合いがヴァルク王の側室の女官の知り合いだとかでな……」

ひとりが語り終わることに、俺も俺も、と言い出す者が出て、この秘密の情報交換は思いのほか長く続いた。

最後に、吟遊詩人が南の辺りで流行っているという曲を披露してみせ、その夜はお開きになった。

セイ・デイルナーク 4

翌朝、セイが食堂に行くと、昨夜の吟遊詩人がいた。

婚約者への土産話が手に入ったので感謝を、と声をかけると、なぜか彼は酷く悲しそうな顔をしている。

「どうかなさったんですか？」

「ああ、いえ……それが、私の相棒から音が逃げてしましましてね」
言いながら、リダールを爪弾くが、吟遊詩人の言う通り、確かにほんのひとかけらの音もしない。

「……それは、その……」

何と言つべきか迷って、セイは言葉を濁す。

「ご愁傷様というのも何だか妙だし、かといって原因も分からないものにアドバイスも出来ない。」

「どうしたのでしょうか、昨日は——いや、昨日はどうだったかな？」

吟遊詩人が虚空に視線をさまよわせ言うのに、セイが破顔する。

「何をおっしゃってるんですか、素晴らしい演奏でしたよ！」

「そうですか……いや、酒を飲みすぎたのか記憶が曖昧で……普段はこんな事はないのに、妙だなあ」

後半はほとんど独り言に近い吟遊詩人の嘆きに、セイは気軽に応じた。

「特に、北の英雄の話はすばらしかったですね」

「北の英雄？」

「ええ、今まで聞いた事のない話でした」

セイの答えに、吟遊詩人が渋面を作る。

「ご冗談を。それは私ではないでしょう。私はそんな話を知りません」

「まさか！ 昨夜吟遊詩人の方はあなたしかいなかった。あなたがリダールを弾きながら語って下さったのに？」

「いい加減にしてください。私の態度が何かお気に触ったなら妙な嫌がらせなどせず、そう言ったらどうです？」

ついにはこちらに厳しい視線を寄越す吟遊詩人に、セイは初めて息を呑んだ。

——これは、何か様子が変だ。

「では、もうひとつ。ヴァルク王の王子でバキタ王后の子のジオール殿下の……その、本当の父親は大臣のデアグロ閣下だという噂はご存知ですか？」

昨夜、セイがこの吟遊詩人から聞いた話だ。

吟遊詩人が語らなければ、セイの知らずにいた出来事だろう。

が、吟遊詩人は、好奇の色を浮かべた目のまま、こう言った。

「ほう、それは初耳だ。ぜひ詳しく聞かせてくださいませんか？
リダールは壊れていても、この通り、私には声がある。お返しに何か物語をひとつ、というのはどうですか？」

おそろしい予感が、セイの中を駆け抜ける。

「……………いえ、その——ただの、噂です。私もそれしか知りません」

やっとの事でそれだけを言うと、吟遊詩人の視線から逃げ出すように部屋に戻った。

部屋に戻ってやっと、抱えていた——荷物を手放せるほど、安全な場所ではない——オルゴール自鳴琴の包みを必死に解く。

心なしか、オルゴール自鳴琴が温かい気がした。

嚴重な包みを解いて、現れたオルゴール自鳴琴の、上蓋に描かれた螺鈿細工の模様が煌く。

輝かしいというよりは、妖しいその煌きに、セイは畏怖に近いものを感じた。

ただの箱にも関わらず、である。

——これを婚約者に渡す？

冗談ではない、とセイは思った。

こんな、得体のしれない物を渡すわけにはいかない。断じて、だ。

そう思うが、螺旋を描くその模様から目が離せない。

引き込まれるように、それを見入ってしまう。

手が吸い付いたように離れなかった。

震える手で、オルゴール自鳴琴の側面にある螺子を巻いた。

蓋を開き、何も入っていない簡素な木の板でできた内側を覗き込む。

紅い鞠、白い鞠、追いかけて、天高くまで

転がった先はおてんとうさまの鼻先で

白い光で鞠は弾かれ、次に行ったのは銀色の

冷たい冷たい、おつきさまのまんまえさ

子供のころに聞き覚えた戯れ歌を、オルゴール自鳴琴に吹き込む。

蓋を閉じて、もう一度同じ歌を歌おうと口を開いた。

「……………」

声が、出ない。

いや、何の音を出して良いのか分からない。

紅い鞠、白い鞠、追いかけて、天高くまで

鞠はおつきさまの顔をすべって、

くるりとまわっておほしさまのそばに

追いついて、鞠を取ったらすっと落ちた

もう一度くり返し歌おうとする。

しかし、どう考えても歌の前半が思い出せない。

後半ばかりが頭をめぐる。

知っているはずなのに、分からない。

未だに震えの収まらない手指を無理矢理動かし、セイは螺子を巻かないままに蓋を開いた。

南訛りのダミ声。

北の英雄の話。

悪鬼バキタ王后の話。

そしてそれにまつわる噂話。

南の流行り歌。

最後に、セイの声で戯れ歌が流れた。

まったく聞き覚えのないメロディと歌詞。しかし、聞こえてくるのは確かにセイの声だ。

ついさっき歌ったはずなのに、オルゴール自鳴琴にその声を盗み取られてしまった。

記憶の片隅にすら、子供のころから親しんだはずのその歌は残らない。

オルゴール自鳴琴が鳴り止むと同時に、戯れ歌の後半を歌う。

メロディも歌詞もぴつたりと合っている。

それでも、たった今歌ったばかりの前半だけ記憶になかった。

背筋が冷える。

自分は、大変なものを手にしてしまった。

捨て去るには抗い難いほどに、セイは自鳴琴オルゴールに魅了されてしまっていた。

セイにできたのは、ただ深く深く、沈めるように自鳴琴オルゴールをしまいこみ、もはや決して人目に触れぬところまで運ぶ事だけだった。

ミサト・ツユリ 1

ミサトは、オルゴール自鳴琴職人の娘として生まれたわけではない。

父が道楽の自鳴琴オルゴール作りなぞを始めてしまったので、オルゴール自鳴琴職人の娘と名乗っているのだった。

もつとも、こんな山奥で若い娘と老父がふたりきりで暮らしているのであれば、多少変わった職種の方が良いのかもしれないが。

山奥といっても、森の木々深いところではない。

水こそ豊富ながら、木々深い森より更に上に位置する、灌木がまばらに生える山肌の露出した高山地帯である。

そこに一体誰が建てたものか、こじんまりとした、だが立派な屋敷が居を構えている。

ここがミサトの家だった。

父のために森の方まで下りて山菜と薬草を摘み、帰ってから占い盤を見下ろすのがミサトの習慣だった。

見下ろした盤には、普段と違う兆候が見て取れる。

北西から、ミサトの待ち人が現れる兆候だった。

思わず、頬をほころばせたミサトだったが、その直後、待ち人に悪いものがかかっているのを感じる。

否、別段悪くも良くもない。ただ、今は悪いほうに傾いているものだ。

何だろうか、と考える。

ミサトが待ち人であるところのセイ・ディルナークと結婚を約したのは三年前。

結婚の約束が反故される兆候が占い盤に現れた事はない。

その先にしても同様の事。

ミサトとセイは、セイが死ぬまでふたりで暮らすはずだった。

じっと、悪いものを見つめる。

正体を見極めようとするが、それは酷く曖昧で力があるようにもないようにも思える。

ただ、酷く不安定で、性質が持ち主に左右されるようだということころまでは見て取れた。

なぜなら、セイがその「モノ」と移動するたびに、気配が揺れるからである。

ミサトは窓辺により、辺りの鳥たちを招いた。

大小様々な、種類関係なく、辺りの鳥が一斉に集まってくる。

「誰かわたしの大切な人を迎えに行つてはくれないかしら？」

ミサトの声に、くちばしの赤い鳥が一羽、威勢良くふもとへ向かつて飛び出していく。

「ありがとう、宜しくお願いするわね」

この辺りは山の奥で、ともすれば霧や靄のかかる場所だ。

ミサトならばともかく、他の者では迷いかねない。

現にセイとも、セイが薬草を探して山に踏み入った時迷つてミサトの家までたどり着いたのだ。

父がふもとの人とも交流があるので、一応道らしきものはあるが、それも地元の方が晴れた視界のいい日にやっと通れる程度のものである。

ならば案内を出す方が安全というものだった。

「父上様。もうすぐセイ様がいらっしゃるわ」

採ってきた山菜と薬草、そしてふもとで買った穀物を煮込んだものを父の元に運ぶ。

父はこの三年の間にめつきり老け込んで、もはや寝台を立ち上げる事もできなかった。

「そうかい。良かったね……ミサト」

「ええ、だから父上様も早くお元気になって下さいませ」

言いながら、父の背中に柔らかい布を押し込み、体を支えるようにして、食事を父の手元に置く。

「ありがとうございます、ミサト」

言った後、気のせいのような小さな声で父が呟く。

「……ミサト、私はあとの位生きられるんだい？」

「それはわたしの決める事ではありませんもの。分かりませんわ」

はぐらかすように言う娘に、父が視線を向ける。

「お前の必ず当る占いにもそう出ているのかい？」

「いいえ、」

ミサトは正直に答えた。

父は、セイがこの家を訪れて数日の後に眠るように死ぬ。

それはもう決まっている事で、覆らない。

「この年になってまで見苦しく思うだろうがね、私は死ぬのが嫌なんだ。ここでずっとお前と暮らしていたいんだよ」

「わたしもですわ。父上様」

ミサトは微笑みをもってそう応えた。

「……人間というのは馬鹿馬鹿しい生き物だね。どんなに献身的に、どんなに親切に接してもらっていても、疑りの心を持つ」

「ならばここで胸を開いて、気持ちをとり出して見せれば分かっていただけますかしら？」

ミサトのこの問いに、父が苦笑した。

「それに肯、と応える輩には、そうしてやってもまだ裏があると疑るに違いない。そんな輩にそこまでしてやる必要はないよ」

窓の外で小鳥がさえずる。

「セイ様がいらっしゃったようですわ」

「長旅でお疲れだろう、早く体を休ませておやり」

「ええ、分かりましたわ」

娘が出て行くのを見送って、父親は窓辺で毛づくろいする小鳥を見る。

「ありがとうよ」

けれども、その言葉は、小鳥に通じたようには思われなかった。

ミサト・ツユリ 2

「セイ様、お待ちしておりましたわ」

ミサトが笑顔を顔に浮かべ、気持ちの昂りのために頬を紅く、胸を大きく上下させて、それでも声だけは控えめにセイを迎える。

「……ミサト」

対照的に、セイは幻でも見ているような目で婚約者を見た。

目の下に黒く隈が出来ている。顔も青白く、とても健康には見えない。

衣服の裾に見え隠れする体も、細い。何より、覇気がまったく感じられなかった。

「セイ様？ どうかなさったのですか？」

流石にいぶかって、ミサトがそう尋ねる。

尋ねつつ、占い盤で見た時よりも悪いものの力が勝っているように感じた。

おそらく、彼の不思議な態度もそのせいなのだろう。

一体どこから、と見やれば、セイが不自然なほどにしっかりと握り締めている麻袋がある。

袋の口を縛る紐をきつく手に巻きつけているために、片手が浅黒く鬱血していた。

「セイ様！」

悲鳴をあげて、麻袋を外させようとするが、セイ自身がそれを拒んだ。

「いや！ これは構わないんだ」

「では、袋には指一本触れないと誓います。ですから、どうか手当てをさせて下さいませ」

そこまで言われて、セイもようやく諦めたのか、家の中に入ると麻袋から何とか手を離し、膝の上に置く事で妥協した。

指先には壊死している部分もある。

なぜここまで、麻袋から手を離す事が罪悪であるとも言つように、麻袋を押さえつけなければならぬのか、ミサトには理解できなかった。

薬草を扱う仕事柄、けつして綺麗とは言えなかったが、器用に動くセイの指が、冷たく変色して、自分の意思が伝わらないのだというように力なく垂れているのは堪えられなかった。

「こつした怪我によく効く薬がありますのよ」

言つて、ひきだし抽斗から特別の薬壺を取り出す。

父のどんな怪我にも使った事のない薬だった。

一刻を争うような怪我をした場合だけ使おうと思っていたものだった。

それを使っても、早く傷を治したかった。

薬を丁寧にセイの指に塗りつけてから、清潔な布で手早く覆った。

「セイ様。一体、道中何があったのですか？ セイ様と共に何かがここに来たと、占い盤が言っているのです」

姿勢を正してそう尋ねれば、セイが身を固くする。

「……君にはその占いで、僕の持ってきたものが何か分かるんじゃないのかい？」

「いいえ、それが持ち主によって性質の変わる不安定な存在である事は分かりました。でもそれだけです。それ以外は分からないのです」

「……これは悪いものなんだね？」

「いいえ、セイ様が悪いものだと思っているのです」

セイが顔をしかめる。

「その何が違うんだい？」

「何がそれをそれたらしめているかが違うのです」

言ってから、少し抽象的かもしれないと思って、ミサトは付け加える。

「セイ様がそれを良いものだと思えば良いものになりますわ」

端的に言えば、つまりそういう事だった。

重要な物ではない。

それをどう扱うかという、扱う側の問題だった。

「これをとてもし良いものだとは思えない」

セイが拳を握り締めてうめくように、声を絞り出す。

「……セイ様。何があったかお教えいただけますか？」

セイがただ首を振るので、ミサトはそこで追求を諦めた。

セイがミサトの家を訪れてたったの数日で、壊死まで起していた手指は不思議とすっかり治ってしまった。

それと引き換えのように、ミサトの父が眠るように息を引き取った。

占い盤の示した通りであった。

「私の願いを叶えてくれてありがとう、ミサト」

というのが、彼の最期の言葉だった。

死期を予感しての言葉だったのだろう。

ミサトとセイは喪に服し、喪が明けてから晴れて結婚をする段取りが決まった。

結婚といっても大仰なものではない。

東の国の風習に倣って、一晚を共にして互いの帯を交換し合い、食事を共にし、更に西の国の風習に倣って、互いの指に指輪をはめるだけである。

けれど、その頃になってもセイの表情が明るくなる事はなかった。

ミサト・ツユリ 3

「ミサト、あの袋の中身の話なんだけれど、聞いてくれるだろうか」

セイがそう切り出したのは、喪の明ける前日——結婚の夜の前の日だった。

「もちろんですわ。セイ様」

ミサトがそう言って、席に着く。

セイも袋を手にして椅子に腰かけた。

「西国から東国に行くには、ガルシアの街道を通るしかない。ガルシア街道に出るには、一度カラル・ベラルという西国と南国をつなぐ大きな港に出なければいけないんだ」

「……ガルシアの街道、ですか？」

ミサトが不思議そうに言うのに、あ、とセイは思いつく。

「ああ、こちらでは砂漠シャームア・ダ・シージェドゥの西街道と呼んでいるのだったつけ……や
やこしいね、」

「いえ、砂漠シャームア・ダ・シージェドゥの西街道に出るにはカラル・ベラルの港に出なければ
いけないのですわね。それで、それがどうしたのですか？」

「ちょうど僕の出航前に酷い嵐が起きて、カラル・ベラルの港に数
日滞在しなければなくなってしまうんだ」

セイはずっと手を離さなかっただんの袋を机に置き、包みを解きはじめた。

「カラル・ベラルから半日の所にニイベの町という小さな町があるんだ。僕はこれをそこで拾った」

現れるのは複雑な螺旋の模様を描いた意匠の印象的な、螺鈿ルゴールの自鳴琴。

はっとミサトが息を呑む。

燈火を受けて煌く螺鈿は、艶を刷いたように妖しげで、吸い込まれそうである。

はじまりもおわりも見つけられない計算された模様は、芸術というには異質で、神の業というには神聖さに欠けた。

悪魔のものであると言った方がまだしも納得できる。

実際、セイはそのようなものに違いないと信じていた。

しかし、ミサトはそんな事に驚いたのではなかった。

「セイ様。これを、どこで拾われたのですか？」

厳しい表情で言うミサトを不審に思いつつも、一応答える。

「ニイベの町の海岸だよ。恐らく難破船の乗組員が何かのものだったのだと思う。油紙で幾重にも包まれていたので、濡れずに済んだ

んだ」

「これは——数年前から行方不明になっていた父上様が全身全霊をかけた、最後の作品です。間違いありません」

「……なんだって？」

言われた内容が理解できずに、思わずセイが聞き返す。

「この意匠、見覚えがありますわ。どうした訳か行方不明になったきり、占い盤でもその行方が見えませんでしたので、盗まれて壊されてしまったのだろうと思っていたのです」

言いながら、もう一度ミサトはその自鳴琴オルゴールを眺めやる。

確かに、これは以前の自鳴琴オルゴールではない。

もはやそれとは異質のものになっている。

これでは、自鳴琴オルゴールを探した占い盤が沈黙を守るのももっともだった。

「——そんな、まさか……これが、お義父さんの最後の作品？ 何かの違いじゃないのか？ こんな……」

セイの言葉に詰まった先は、言われずとも分かった。

——こんな、禍々しいものが。

「セイ様。一流の職人は、造った物に魂を込めると申します。こん

な山奥で隠遁して暮らしていた父ですもの、いつしか地仙オルゴールのような力を得ていたのかもしれませんが。だとすれば、この自鳴琴オルゴールがこのように不思議な物になっていても、何の不思議もありませんわ」

流石に霞を食べて生きていたわけではないが、父がここに来てから生臭物は一切口にしていない。

身を清め、一心に自鳴琴オルゴールと向き合っていたならば、一生に一度はそのような事が起きてもおかしくはなかった。

「それに、セイ様。その自鳴琴オルゴールを貸していただけますか？」

「しかし——」

「大丈夫ですわ」

ミサトの声に促されて、セイは自鳴琴オルゴールをミサトの方へ押しやった。

それにミサトの手が触れる。

不意に、セイは青い風に吹かれたような心地がした。

「気のせいだろうか、さつきよりも自鳴琴オルゴールが美しく見える」

「気のせいではありませんわ。申し上げましたでしょう？ 何がそれをそれたらしめているかが違うのです」

ミサトが涼やかな声で言った。

ミサト・ツユリ 4

「ですが、セイ様がこの自鳴琴^{オルゴール}を恐れる理由は何ですか？ 確かに不思議な力を持った不安定なものですが、恐れを抱く程の力はないように思いますわ」

占いなどをするせいもあって、勘が鋭いのか、ミサトがセイに尋ねる。その様子は心底不思議そうだ。

「はじめ僕は、蓋の模様が素晴らしいので、ミサトへの贈り物にしようと思ったんだ……お金もあまりなかったものだから……」

最後だけは視線をそらして、口早に言う。

「そう思って蓋を開けたら、中にこんな紙が入っていた」

「何と書かれているのですか？」

ミサトが尋ねるのも無理はない。

彼女は東国の言葉しか話す事ができない。

「この紙によれば、この自鳴琴^{オルゴール}は、螺子を回して蓋を開けると音を箱の中に留める事ができるのだという。螺子を回さずにあげれば、また聞けるのだ、と」

「それは珍しい自鳴琴^{オルゴール}ですわね」

感心してミサトが蓋を開ける。

南国訛りのダミ声がした。

次いで、カラル・ベラルで会った吟遊詩人のリダールと声。

その店にいた客の声。

最後に、セイの声。

「本当ですわ、セイ様の声がしました」

嬉しそうにミサトが微笑む。

「その自鳴琴^{オルゴール}は、箱の中に閉じ込めた音を、奪い取ってしまうんだ」

「どついう事ですか？」

「僕も、僕に話をしてくれた吟遊詩人も、箱の中に閉じ込めた分の声がすっかりどこかへ行ってしまったんだ。その箱の中で僕の歌う歌を、僕はもう知らない、歌えないんだ」

ここに至って、ようやくミサトにも事の重大さが見えてきた。

同時に、セイの気付いていない可能性までもを見抜く。

「つまり、この自鳴琴^{オルゴール}は音を媒体に力を内に溜めてしまっているのですわね」

あるいはそれは、死を恐れるあまり力を強く願った父の心が移されたその証なのかもしれない、とミサトは思った。

「だとすれば、この自鳴琴オルゴールを悪用しようとする輩が出て不思議はありませんわ」

言いながらミサトが思い浮かべたのは、まだこの時代には多かった魔術師、呪術師と呼ばれる者たちだった。

言葉と旋律が力の媒体になるのは、昔から言い伝えられてきた事だ。

しかしそれらはどれも一過性の物で、留め置けるものではなかった。

それを蓄積できるとなれば、目の色を変えて自鳴琴オルゴールを得ようとする者が現れるかもしれない。

瞬間、ミサトはこの自鳴琴オルゴールを壊してしまおうか、と思う。

こんな物騒なものはないに限るからだ。

そう思っただけの意匠を見る。

見れば見るほど、見事な意匠だった。

円を描くように配された螺鈿は、円に見えて、渦にも見える。

はじまりと思ったものがはじまりでなく、おわりと思ったものがおわりでない。

螺旋を描くようにのぼりつめる紋様には果てがなく、時間を忘れ

る。

描く事のできない永遠を体現したかのような美しい箱だった。

壊すにはあまりに惜しい。

それに、まだ力はさほどではなく、純粋な力である故に、周囲の影響を受けやすい。

ミサトが管理すれば悪いものに転じる事もないだろう。

螺鈿細工に指を滑らせ、ミサトは内心で思う。

あるいは、これは感傷であるのかもしれない、と。

ミサトの長い人生のほんの一瞬を共に過ごした父への、未練とも愛情ともつかない感傷なのかもしれない、と。

ミサトは静かに席を立つと、自室の占い盤を持って帰ってくる。

これからのこの自鳴琴オルゴールの運命を占う。

ここで廃棄される運命なのか。

まだ、何か成す事があるのか。

セイはミサトのその様子を黙って見ていた。

彼女の占いの腕前は素晴らしい。

東国で彼女に会うまで、占いなぞ信じてもいなかったが、ミサトは運命そのものを自らが織っているように、先の事を見通せるのである。

重苦しくセイにのしかかっていた罪悪感と、義務感と、恐怖心が安らぐ。

その瞬間に、ミサトが盤を見つめながら告げた。

「この自鳴琴は、音を封じる事を書いた注意書きを書き添えてこの家に封印いたしましょう」

それからセイの方を向いてにこりと笑う。

「それがもつとも良い道であると出ましたわ」

自鳴琴は、かつて赤髪赤眼の海の民の少女がそうしたように、セイとミサトによって西国言語と東国言語で注意書きをつけられ、屋敷の奥深くに秘せられた。

それは何年も何年も後になるまで、誰の手にも渡る事はなかった。

フォア・ミン 1

長い長い時が経った。

あるいは、さほど長い時間ではなかったのかもしれない。

かつて、西国の薬師と東国の自鳴琴オルゴール職人の娘の夫婦が住んでいたという家は廃墟になっていた。

しかし、そこに本当に人が住んでいたと言う証拠を手にしている者はいない。

ただ、長くそう言われていた。

あるいは、人によってはそれは仙人の夫婦であったという。

食べ物を手にするのも大変であろう土地に住んでいた事から、霞を食べるといふ仙人に発想が繋がったのだらう。

もっとも、そんな事はフォア・ミンにとってはどうでもいい事だった。

彼の価値観は非常にシンプルだ。

つまり、金になるかならないかである。

この辺りの山には金が出るという。

だから彼はこの山を買い占めたのだ。

その中に廃墟があると聞き、金目の物はないかとわざわざふもとからやってきたのであった。

ろくに期待はしていなかったが、伝説の仙人夫婦が住んだという家は山の上の方にあるという。

フォア・ミンの常識では、それは金持ちがわざわざそんな不便な土地に金をかけて家を建てたという事だ。

金がなければ、山の上の方などという場所に家が建てられようはずがない。

何せ、地元の民でも迷うような細い獣道しかないというのだ。

相当の金を積んで建てたのは間違いがない。

そんな家ならば、いかに廃墟とはいえ金目の物のひとつやふたつあってもおかしくはないのだ。

そんなわけで、フォア・ミンは大きく突き出た腹に難儀しながら、息を切らして山を登っているのである。

フォア・ミンというのは彼の本当の名前ではない。

彼は孤児で、名前を持っていなかった。

だから、自分でつけた。

同じように欲しい物は何でも手にしてきた。

彼を強欲だと罵る者も多いが、そんなものは彼に言わせれば何を手にする努力もしない者の戯言だった。

他者から奪い取ってでも得たければそうすれば良い。

もちろんフォア・ミン自身から何かを奪っても良い。

ただし、そうされないだけの力得る事に、彼はとても熱心だった。

仙人の住居だという廃墟にわざわざ登ったのは、もちろん金目の物があるかどうかというのが第一である。

だが、仙人の住処というくらいなのだから、何か不思議の力を得る事ができないかとも思っていた。

フォア・ミンは神には祈らなかったが、占いやら迷信の類を信じている。

もちろんそれを信じる土台に生まれ育ったのもあるが、彼はかつて不思議を見た事があった。

まだ彼が子どもの頃に、商いを覚えるために西の商船に乗った事があったのである。

しかし、何の原因か船は流され、東の海流に呑みこまれそうになった。
トン・ダ・ハイリユウ

実際、そうして海流に吞まれ、永久に戻って来なかった者は多い。

フォア・ミン自身、自分もここまでかと絶望したものである。

彼らの商船には護衛船として海の民と呼ばれる南の民の船がついていた。

フォア・ミンは暴利な値段を自らにつける海の民を馬鹿にしていた。

何せ、自分たちには海神の加護があるので船が沈まぬというのである。

個人単位で運の良し悪しはあるかもしれないが、一族全体で運がいいなどという事はない。

たしかに、操船の技術は西の商船の及ぶところではない、腕っ節も強いという。

だが、それだけだ。

嵐には翻弄され、海流につかまれば死ぬしかない。

鼻で笑ったフォア・ミンは、年配の水夫にたしなめられた。

大金を払うからには、その理由があるのだと。

彼は奇しくも、その奇跡を目の当たりにする事になったのである。

ガラディオ山脈から吹き降ろす季節風と、凶暴な悪魔の海流、そして嵐にまで見舞われ、誰もが諦めた時、海の民の少女が立ち上が

った。

紅い髪を振り乱し、紅い瞳にきつい光を宿し、皆を鼓舞した。

お前たちは何だ、と訊いた。

海を住处とする海の民と、海に命をつなぐ西の商人ではないのか、と問われた。

命と技術に値段をつけ、決して死ななかったから今ここにいる船夫、そうではないのかと問われた。

幼稚と言えはそれまでの科白せりふだった。

だが、これより酷い嵐を知っている、と言った者がいた。

だが、これより酷い季節風に見舞われた事がある、と言った者がいた。

だが、これより酷く海流に近づいてしまった事がある、と言った者がいた。

足りないものは何ひとつない、と彼女が言った。誰もが失くした希望は、彼女が持っていた。

荷は流された。——しかし、船と命は助かったのである。

フォア・ミンは、誰に迷信深いとせせら笑われても、不思議を信じた。

それほど風と嵐は酷く、海流はすぐ側まで来ていた。

帰港した船を見て、誰もが奇跡だと声をあげた。

フォア・ミンもそう思った。

不思議の力は確かにあり、そしてそれは実際的な力を持っている。

フォア・ミン 2

「だが、これはろくに期待できんかもしれない」

嘆息するのは、それほど荒れ様が酷いからだ。

彼の言葉に、地元の案内人と通訳、そして護衛兼世話係としてついてきていた者たちが大きく頷く。

視線が、だから早く帰ろう、と言っている。

フォア・ミンはそれを無視した。

数十年どころの騒ぎでなく、数百年人が住まなければこうなるかもしれない、といった酷い有様である。

木が腐り、そこここに植物がはびこり、動物のいた跡もある。

主柱が無事なのが唯一の救いだ、この有様の中にあつては、かえって不審でもある。

一瞬で崩れる事がなさそうなのは、家捜しをするつもりでやってきたフォア・ミンには好都合だった。

しかし、ふもとの者の言い分によれば、数年前までは、確実にここに人が住んでいたはずなのである。

それがある日、忽然と姿を消したのだ。

「気付いたらな、娘さんが薬草や山菜と引き換えに物を買いに来なくなっただよ。で、ふたりで病気でもしてたら大変だと思って行ってみたら、ボロボロの家があるだけでよ。きつとあの綺麗な娘さんが仙女だったんじゃないかって専らの噂なんだよ」と言うのが、ふもとの者の言い分だった。

仙女が山菜や薬草を口にするはずもないと思うのだが、ふもとの村人は大真面目である。

あるいは、時に民衆は知らず真実を口にする。

その類であるのかもしれない、とフォア・ミンは思った。

朱塗りの、元は美しかっただろっ戸口をくぐり、中を覗き込む。

張り巡らされた蜘蛛の巣を払いのけると、厚くつもった埃の上に動物の歩いたらしい足跡が残っていた。

構わず踏み込むと床板が大きくきしむ。底が抜けるかもしれないと思った。

穴の空いた屋根から日が差し込んでいる。

日差しの当たっている先に、木製の木箱があった。

赤い紙で封がしてある。

それが、日の当たっているせいか、封印の色のせいか妙に目を引いた。

近づいて眺める。

一抱え程度の箱である。

大きいとも言えないが、小さいとも言えない。

何やら文字の書かれた封印だけが、風化したこの屋敷の中で新品のように綺麗である。

中を改めようとフォア・ミンが封に触れた刹那、微かな音を立てて、封印が引きちぎれた。

そのまま火でもつけられたかのようにさっと灰のようなものになって、空中にかき消えた。

「——これは、」

もしや探し続けていたものだろうか。

思いながら、そっと木箱の蓋を開ける。

中にあつたのも、箱だった。

ただし、無装飾で何の色気もない木箱と違い、上蓋にびっしりと螺鈿細工で模様が描かれている。

不思議な模様だった。

円を描くように渦を巻き、それでいてはじまりもおわりも見つからない。

螺旋を描いたものかと言われれば、それもよく分からない。

螺旋だと思って見ると、もう螺旋には見えない。

円環かと思つて見ると、もう円環には見えない。

それでいて妙に惹きつけられる模様だった。

一緒に絹の巻物が入られていた。

広げれば、はじめは西国言語。

そして後半は、達筆な女文字で何事が書いてある。

西国言語は読めなかったが、女文字の方は読む事ができた。

そこにはこう書かれていた。

——この箱は^{オルゴール}自鳴琴です。

ただし、ただの^{オルゴール}自鳴琴ではありません。

人の声や、楽器の音を内に取り込む力を持った^{オルゴール}自鳴琴なので
す。

内に取り込まれた力は、^{オルゴール}自鳴琴の中にのみ存在する事になり、
この世界での存在を失います。

その上、自鳴琴オルゴールに入れた声や音はその楽器や、それを発した者の記憶からも消えてしまします。

これはともすれば、大変危険な自鳴琴オルゴールです。

悪用する者が現れぬとも限りませんので、これをここに封じます。

もし、万が一、封印の解けた時に、これを手にした者が悪意なく誰かの記憶を奪うという過ちを二度と繰り返さぬ様、使い方も同時に記しておきます。

まず、声や音を取り込みたい時には自鳴琴オルゴールの螺子を巻き、蓋を開きます。

取り込んだ声や音を聞きたい時には、自鳴琴オルゴールの蓋をただ開けます。

螺子を巻いてはいけません。

自鳴琴オルゴールの中に取り込んだ音は消える事はありません。

ただ、蓄えていくのみです。

この自鳴琴オルゴールが、願わくば誰の手にも渡らぬ事を。

そして、万が一誰かが手にした場合も、願わくば悪用されぬ事を。

切に祈ります――

シェンニユイ

フォア・ミンはその書き付けを幾度も幾度もくり返し読んで、最後に口の端を吊り上げて、さも嬉しそうに笑った。

「良い物」を。

それもとて「良い物」を拾ったと思ったのである。

フォア・ミン 3

フォア・ミンのまずした事は、自鳴琴オルゴールの中に何が入っているかの確認だった。

まずは、自分で聞いてみて、正確に理解できる言語がないと知ると、南国と西国の言語の分かる者を雇い、内容を訳させた。

南の民が歌ったと思しき即興歌。

西の吟遊詩人らしき男の語った北の英雄の話。

同じく、南国の絵師と王后の非道の話。

同じ南国の王の、噂話がいくつか。

南の流行歌。

最後に、西国で古くから伝わる子どもの戯れ歌。

内容はこれからいくらでも追加できるにしても、これは西のご婦人方が、あるいは王族の姫君に売るのが妥当であるかも知れないと思う。

つまり、フォア・ミンはこの自鳴琴オルゴールを物を食べぬ、眠らぬ、好きな時に話させる事ができ、決して話を忘れる事のない吟遊詩人の代わりとして売りつけようと思ったのであった。

貴族のご婦人方や、姫君は、外の世界への興味が人一倍あるが、

けれど決してひとりで外に出るような真似はできない。

彼に言わせれば、元来女性というのは噂話の好きなものだ。

一番の好物は恋の物語。

愛憎劇、喜悲劇、そして少しばかりの歴史や王族貴族の物語。

不思議の力の物語。

物語の幅を広く、量を多く。

そうすればその分だけ高く売れる。

フォア・ミンはそう考えたのであった。

そこで、彼ははじめ、西国言語の分かる吟遊詩人をできる限り集めさせた。

最初のうちは、貴族の席でも語るような金と引き換えに語りを売る、多少は高級な吟遊詩人を。

それがなかなか見つからなくなると、民衆の間で語るような吟遊詩人に。

あるいは吟遊詩人でなくとも、物語を語る事のできる語り部を。

時には、子どものために母が語る物語を。

時には、同世代の青年たちが自慢のために語る武勇談を。

かき集めた語り手たちは、まず全員が自鳴琴オルゴールの語る物語を聞かされ、自鳴琴オルゴールの中にない物語だけを語らせる。

語りつくして物語を失った語り手は、己が一体どれだけの物語を語ったのかすら分らない。

その物語を失った事すら分らない。

そこにつけこんで、どの語り手にも一話分の金しか払わなかった。

それが地位も技術もない、一般の語り部になると更に酷くなり、語るだけ語らせて、語った話の分だけ金をやるからどの物語を語ったのか言え、と言つて報酬も渡さずに屋敷を追い出す始末だった。

語り部たちは物語を失い、語り部を引き継ぐべき者は育たず、子どもは物語を知らず。

気づかぬ間に、語りの世界の荒廃が始まった。

長い長い時間と膨大な金がかかった。

用済みとなればかまわずとも、探して呼び寄せるのに金がかかったのである。

フォア・ミンはこの作業に心血を注いだ。

これが自らの人生の大仕事になると、気づいていた。

けれど、それを引き換えにしてもこれは莫大な利益を産むだろう

と踏んでいた。

もちろん、西の王侯貴族へ売る腹積もりである。

しかし、もうひとつ、もしかしたら、と思っている心当たりがあった。

手紙にあった「この自鳴琴オルゴールの力を悪用する者」である。

フォア・ミンにはどちらでもかまわない。

ただ、それによって利益を得るのが大切だったのである。

そうして物語を集める間に、フォア・ミンは螺子の型を取り、元からついていたものから、装飾的で宝石をちりばめた豪華なものに変えさせた。

そして、それが傷ついたりはならぬと、語り部に語らせる時に螺子を巻くには、今まで通りの螺子を使っていた。

留め金も金を惜しまず、金細工の職人を呼び寄せて作らせた。

少しでも、自鳴琴オルゴールの価値を上げようとしたのである。

フォア・ミン 4

オルゴール 自鳴琴の力は膨れ上がり、もはやいくつの物語と歌と曲と人々の感情を閉じ込めたのかすら分からなくなった。

そしてそれにしたがって、オルゴール 自鳴琴の妖しげな引力は増していくのであった。

語り部たちに語りつくさせ、物語という物語を全てオルゴール 自鳴琴に籠め、箱を磨き上げ、美しい螺子につけかえ、ペレロード 紅天鵲絨をしきつめた。

そうして螺鈿の宝石箱に作り変えられたオルゴール 自鳴琴は、ついに西の婦人に売られようとしていた。

——まさに、その矢先。

東国と西国の間に争いが起きた。

南の王の権力が失墜し、武器商人が横行し、西と東が滅びかけた南を巡って争いいさかを起こしたのだ。

はじめはほんの小競り合いだったが、その戦火はあつという間に各地に広がり、商いどころではなくなってしまうた。

東国の王に財産を召し上げられ、いざという時のために西国貨幣に換えておいた金は、東国における価値を失った。

東国随一の商人であったフォア・ミンは、見る間に財産を減らし、

命からがら東国を抜け出す羽目になってしまったのである。

それでもフォア・ミンはオルゴール宝石箱を手放さなかった。

それがただ唯一、己が富を回復する手立てだと知っていたのである。

彼が向かったのは、東から国境でもある霊峰・蓬遠峰を越えた先——北国だった。

北の王族は伝統と血筋を何よりも重んじる。

自分たちは歴史ある民だと言いながら、その実ガラディオや蓬遠峰の山脈で他国と分けられたその国は、文化の発達が遅く、他国の文化に憧れているというのは、商人たちには有名な話。

北の王族に、西国の物語という物語を詰め込んだこのオルゴール宝石箱を高く買い取ってもらおうという腹であった。

奇遇にも、北にはフォア・ミンの旧知の友がいた。

彼に北の貴族を紹介してもらい、北の貴族を相手に手広く商売を始めた。

フォア・ミンが、いくつもある隠し倉庫にひっそりと隠し持っていた——もちろん、課税と強引な権力者の搾取をまぬがれるためであったが——秘蔵の宝を出し、それを売り始めたのである。

幸い、他国は戦争の真っ最中。

軍資金のためよと他国から売られてきて、異国のものは溢れかえったが、質のいいものとなるとなかなかに難しい。

西にせよ東にせよ、過去の文化遺産をなげうつまでは切羽詰っていないらしい。

手に入りそうで入らない、異文化をもたらしたフォア・ミンは貴族たちに重用された。

狭い国な上に単一民族国家。

更に血統の正統性を重んじるお国柄。

貴族同士の横のつながりも強かったが、王族とのつながりも強かったのである。

フォア・ミンの狙い通り、ほどなく彼は王妃とその子どもたちに呼び出されたのであった。

フェニス・R・リンク 1

フェニスは北の王家の王女として生まれた。

幼い頃には分からなかったが、他所の国について学ぶ間に気付いた。北は、非常に男性中心的な国家であった。

というのも、北の国の守護女神が氷の女王と呼び習わされる女性神であったために、玉座につき女神と婚姻を交わすのは男性でなくてはならなかったからだ。

そのため、北には后という概念がない。

王が婚姻を交わすのは唯一女神たる氷の女王だけであり、王の子どもを宿すのは、氷の女王の現身うつしみとなるべく育てられた、巫女の仕事だったからだ。

同時に、女神の子である王子、王女も婚姻を許されない。

第一王子のみが氷の女神との婚姻を許され、他の子どもは一生独り身を貫き、女神の血を容易に下界に広めぬようにしなければならぬ。

女神は上界に住む高貴な存在であり、時折下界に吹雪をまといやってくる。

そして目に留まった者を気まぐれに連れ去るのである。

連れ去られた者は、下賤な下界の夢から醒め、女神の住まう上界

に辿りつくと言う。

あるいは、女神に呼ばれ、この世で死ぬ事で上界に行けるのである。

北に住まう者は、みな不慮の事故で死ぬ事を恐れる。女神に呼ばれずに死ねば、上界に行けないと信じているからだ。

その女神が、下界に血を広げる事を好むはずがない。

そのため、王女であるフェニスは、王女という身分にありながら、政治的道具にすらならない、どうでも良い子どもとして育てられた。

王として氷の女王につかえる父。巫女として、氷の女王の声を聞く事を第一とする母。

フェニスにとって、第一王子の兄だけが親しむべき家族だったのである。

兄、アルカードは早熟な子どもだった。

自身と妹の扱いに差がある事に敏感に気付き、常に妹を気遣った。

また、非常に学問の好きな性質でもあった。中でも興味を示したのは他国の言語である。

アルカードは王宮という小さな世界の中で、広い世の中の事を知った。そして、妹にもそれを伝えた。

妹であるフェニスも、兄から様々な話を聞くのが好きだった。

兄より幼くとも、噛み砕いた表現で伝えられれば、理解する事ができる。

中でも、特に好きだったのは兄に物語を読んでもらう事だった。

「北の英雄の話をしてあげよう」

フェニスは、アルカードにそう言われるのが、大好きだった。それがフェニスの何より好きな話だったからだ。

「フェニスは本当に北の英雄の物語が好きだね」

ある時、兄に微笑みながらそう言われた。

「だって、アルカードお兄様みたいなんですもの」

「僕に？ どこが似ているのかな？」

「あのね、優しいところ」

「優しい？」

「そうよ。優しくて、自分が傷ついても相手の人を助けてあげるの。それでね、絶対に諦めないの」

フェニスがそう答えると、兄は悲しげに目を細めた。

「アルカードお兄様はお父様みたいに王様になるのでしょうか？」

「そっだよ」

「それは国の人みんなが傷つかないように手助けする事なんですよっ？」

兄がいつもそう言っていた。その受け売りだった。

「だからね、アルカードお兄様は、北の英雄と一緒になのよ」

にこり、とフェニスはアルカードに笑顔を見せる。

「できたら、そうなりたいと思っているんだよ」

「わたしもなれる？」

フェニスはそう尋ねた。

「フェニスはならなくても良いんだよ」

兄はそう答えた。

フェニスはそれをずるいと思った。

それがどれほどの決意を伴っていたのかを理解したのは、兄がいなくなってからだった。

フェニス・R・リンク 2

フェニスが十二の誕生日を迎える数日前に、東の商人が来た。

なんでも、珍しい物をたくさん売っているとかで、フェニスも、兄や母と一緒に見に行ったのだ。

東の商人はでっぷりと太った男で、フェニスは彼をなんとなく嫌いだと思った。

「お前が、最近貴族達に異国の物を多く売っているという東の商人か」

兄が東の言葉でそう尋ねると、商人は驚いたように目を見張った。

「私が東の言葉を話せるのが不思議か？」

「はい……その、見事な発音でいらっしゃる」

それを聞いて、フェニスは兄の言っていた事は正しかったらしい、と内心で呟いた。

つまり、普通の王族は他国の言葉など知らない、という事である。

フェニスは、兄が熱心に異国の勉強をしていたのに触発され、ついでに兄と違い礼儀作法の講義以外を受ける事がなく暇だったために、兄に倣って他国の言語を勉強していたのである。

この頃には既に、公用言語であればどれでも、簡単な会話ならこなせるようになっていた。

今後の課題は、発音の精度である。

一部の者を除き、他国の言葉を使える者はいない。

そのため、東や西、南の言葉で話すと、回りの者にはその意味が分からない。

兄と異国の言葉で話すのは、暗号のようで楽しかった。

「その商人とアルカードは、何を言っているのかしら？」

隣に座った母が扇を口元に寄せてそう尋ねた。

「アルカードお兄様が東の言葉を話せるので驚いているのですわ」

「感心しない趣味だと思っていましたけれど、こういう時には便利なものですわね」

それでもまだ不快である証拠に、眉根を寄せて言う。

「——感心しない？ そうかしら」

南の言葉でフェニスは呟く。

「王子様、お后様、王女様方にお見せしたいのはこの^{オルゴール}宝石箱なのでございます」

商人が笑顔を向けて言うのに、アルカードが怪訝な顔をした。

「……商人。この方は私の父の妻だが后ではない。お后様という呼び方は誤りだ」

その言い方があまりに、フェニスが文法やら発音の間違いをした時に注意する口調そのままだったので、フェニスは笑いをかみ殺すのに苦勞する。

商人の方は、何の事やら分からない、という顔をしていた。

当然だろう。東方王国には北のような王の妻を神とした伝統がない。王の妻は后だと思っているはずだ。

「……左様でございますか。では、奥方様、とお呼びすれば宜しいでしょうか？」

「それならば構わぬ」

アルカードが応える。

「それでは、王子様、奥方様、王女様方。どうぞご覧下さい」

言つて、オルゴール宝石箱を捧げ持った女を呼び寄せ、三人によく見えるように掲げさせた。

「上蓋はかの有名な東の螺鈿細工！ 螺子は銀で作らせ、ダイヤモンド金剛石をあしらわせ、留め金は金細工で有名な南のアレイダから呼び寄せました職人に作らせたもの。そして、何より珍しいのは、このオルゴール宝石箱は物語を奏でるのでございます」

不思議な箱だった。

渦巻く模様が上蓋を占めている。

その模様が何より不思議なのである。

はじまりがどこか、おわりがどこか分らない。

円のようにも、螺旋のようでもあった。

見ていると引き込まれそうになるほど、魅力的な紋様である。

渦を巻いた螺旋は、視線をまずは中央へ導き、それが気付けば外側へと向かわされる。

かと思えば、また中央に向かうのである。

いつまで見ていても飽きない模様だった。

思うフェニスを他所に、商人が宝石箱オルゴールの蓋を開ける。

模様が隠れて、はっとフェニスは我に返る。

一瞬、ここがどこかも。誰といるのかも。自分自身が誰なのかわえ忘れていた。

それほど集中していたのであった。

フェニス・R・リンク 3

「この宝石箱は、^{オルゴール}螺子を巻いて蓋を開け、中に向かって声を出しますと、それを内に籠め、再び蓋を開けた時に幾度でも同じ声を流すのでございます」

途端、調子の外れた音楽が流れた。

早口の南の言葉のようだが、早口が過ぎるのと、^{スラング}俗語らしき言葉だらけでフェニスには意味が分からなかった。

アルカードの様子を盗み見ても、分かっているのやら分かっていないのやら分からない。

兄の事だ、きっと分かっているとフェニスは思った。

次いで、弦楽器らしい音と共に、男の低い声がした。

北を切り開きし、偉大なる初代テルニダ王の時代。

王都からほど近い小さな村に、ひとりの少年が生まれました。

何の力も、何のとりえもない、ごく普通の少年でした。

あまりに驚いて、思わず立ち上がってしまう。

「アルカードお兄様！　これ——北の英雄の物語ですわ！　凄い！」
勢い込んで言う。

とつさに口をついて出たのが北の言葉だったので、商人には意味が分からなかったらしい。

興奮のあまり、顔に血が上っているのが分かる。

それが分かって、冷静にはなれなかった。

「どうでしょう？　お気に召していただけましたでしょうか？」

商人が笑みを浮かべながら言う。それに兄が尋ねた。

「他にはどんな話が入っている？」

「古今東西ありとあらゆる話を集めたつもりにございますが、何分東の片田舎にて、西の主だった話と東に伝わる伝承などを中心に五千百二十一の話が入っております」

——欲しい！！

フェニスは反射的に思う。

物語に興味があつた。模様にも激しく惹かれた。何より、北の英雄の物語が聞きたかつた。

アルカードがこちらを見て苦笑する。

それにフェニスは頬を膨らませた。

知識欲の塊のような兄が、この素晴らしい^{オルゴール}宝石箱を諦めるとはとても思えなかったのだ。

おたがいさま！ と、そう言いたかった。

フェニスとアルカードは、かなりの値段を支払って^{オルゴール}宝石箱を手に入れた。

母は眉をしかめたが、フェニスとアルカードは満足であった。

フェニス・R・リンク 4

フェニスが十六歳になってしばらく経ってからの事である。

当時、フェニスが兄に秘密で熱中していた事がある。

兄が幾度となく語ってくれた北の英雄の話を暗記しようとしたのである。

数年前、東の商人から買い求めた^{オルゴール}宝石箱の中に、北の英雄の話が入っていた。

それは西の言葉ではあったが、北の英雄の物語には違いなかったので、それを暗唱する事にしたのである。

兄がそうしたように、何も見ずに語りたかった。

ついに完璧だ、と思えるまでに暗記をしたフェニスは、ここ数日軽い病で寝込んでいる兄の元へ向かったのである。

兄は喜んでくれると思った。

実際に、もし完璧な暗唱をしてみせたフェニスを見れば、アルカードはとても喜んだ事だろう。

「アルカードお兄様！」

フェニスが兄の部屋に行くと、珍しい事に父と母、それに多くの大臣たちや知らない人がたくさんいた。

「……ごきげんよう」

一瞬ぽかんとしてから、兄に厳しく言い含められた通りに、作法に則り挨拶をする。

誰も答えなかった。母は顔をおおって、肩をふるわせている。

「お兄様？」

寝台に近づいた。天蓋の薄絹をかきわけ、兄を見る。

肌がすき通るように白かった。

見ない数日の間に、随分痩せていた。

触れるとなまぬるかった。

そして、肉という肉がそげてしまったように、固かった。

「お兄様？」

普段ならばすぐに答えてくれる兄は、ぴくりとも動かない。

ついに、我慢しきれなくなった、アルカード付きの女官が、フェニスを後ろから抱き締める。

「アルカード様は、お亡くなりになりました」

「嘘。だって軽いご病気だって聞いたわ。すぐ治るって聞いたわ」

それこそが嘘だった。

そう言って、アルカード自身がフェニスを遠ざけたのだと、後になってから聞いた。

アルカードの葬儀は、大々的に行なわれた。

フェニスも葬儀に参加した。

とても現実とは思われなかった。

次に大人たちがした事は、フェニスを広間に座らせて、大勢で集まって会議をする事だった。

兄に聞いた時には何でも分かるように思ったのに、彼らのしゃべる言葉は何の事だか意味が分からない。

――最も重要ナノハ、何ヨリモ血ノ純潔デアル。

――成人ヲ迎エテイルノガ不幸中ノ幸イダナ。

――否、女王等前例ニ無イ事ハ認メラレヌ。

――シカシ、女神ノ血ヲ引ク才子ハ一人ダ。

――次ノ才子ハ。

――無理ダ。巫女ハ既ニ子ヲ産メヌ駄デアル。

――別ノ巫女ヲ。

――巫女ハ一人ダ。他ニ巫女ハ居ラヌ。

――ナラバ、女王ヲ立テタ所デ巫女ハドウスル。

――王子ノ巫女ハ女ダ。使エヌゾ。

――今カラ育テルシカアルマイ。男ノ巫女ヲナ。

――否、其レ以前ニ女王等立テテハナラヌ。

――ダガシカシ、女神ノ血ヲ引ク才子ハ……。

結論はでなかった。

議論は長く続いた。

三日三晩続いた。

みな、寝食を忘れて議論した。

そして、誰からも忘れられていたフェニスも、食べず、眠らず、ただ兄の死を悼んでいた。

翌年、王が死んだ。

王子と同じ病を得たのだ。

フェニスは、北方王国最初の女王にして、最年少の王位継承者として玉座についた。

フェニス・R・リンク 5

誰もが囁いた。

北はもう終わりだと。

氷の女王の加護を失うのだと。

実際、他国もそう思ったのか、不穏な動きを見せ始めた。

フェニスには幸いな事に、天然の要塞であるセイヌールの大壁——西側のものをガラディオ山脈、東側のものを蓬遠峰^{ボンウェンファン}、またはシリニヴァール山脈とそれぞれの国の者は言うが、北ではこう言っていた——を越えて出兵するのは至難の業のようで、直接的な攻撃はなかなか来なかった。

情けない事に——と、後にフェニスは自身の行動を称した——フェニスが王冠を頂いて真つ先にやったのは、自室に閉じこもる事だった。

「フェニス様！ 何をなさっています！ 早くそこからお出になって下さいませ！」

「嫌よ！ 散々いらない子供だと言っておいて今更王になれ！？ 王になれば、女王なぞ不吉だ！？ 冗談では無いわ！」

「フェニス様！」

そう言って扉を叩いていたのは、兄が特に親しんでいたアズリオ

將軍だと言つ事にも気付かなかった。

「フェニス様、閉じこもってはなりません。王宮を悪の巣窟にするおつもりか？」

「分からない事は我らにお聞き下さい！ どうぞ、お願いですからこの扉をお開けになって下さい！」

思えばそうやって集まった数人が、後にフェニスが信頼する真の臣下になった者たちであつた。

「アルカードお兄様を呼んで！ お父様を蘇らせて！ そうしたら私は王にならずに済むわ！ 氷の女王にそう伝えるがいいわ！」

言い放つて、寝台につつぷす。

拍子に、オルゴール宝石箱が床にたたきつけられた。

黄金の留め金が壊れてはじけ飛ぶ。

リダールと共に、声が響いた。

北を切り開きし、偉大なる初代テルニダ王の時代。

王都からほど近い小さな村に、ひとりの少年が生まれました。

何の力も、何のとりえもない、ごく普通の少年でした。

ある時、北国に魔の者が現れ始めました。

人間が絶望した時に、暗闇から生まれ出る。

血肉を喰らい、国土を嚙下^{えんか}する。

闇よりも、海よりも、漆黒よりも暗い者。

甲殻類をつなぎ合わせた外見に、目鼻すらないただ口だけがぱっくり開いたその姿。

剣も効かず、弓も効かず、槍も効かず、拳も効かず。

人々は恐れ逃げ惑い、対抗する手段すらなく蹂躪され、人々が悲嘆にくれる中。

少年が立ち上がりました。

ひとり助け、ふたり助け。

助けても助けてもまだ助けを求める声が聞こえました。

ただの少年が、己の力だけで魔の者を討ち果たしました。

武器はただひとつ、その身だけでした。

けれどそれは打たれても倒れず、なぎ払われても立ち上がり、

血を吐いてもあきらめませんでした。

北を切り開きし、偉大なる初代テルニダ王の時代。

王都からほど近い小さな村に、ひとりの少年が生まれました。

何の力も、何のとりえもない、ごく普通の少年でした。

けれどそれは打たれても倒れず、なぎ払われても立ち上がり、血を吐いてもあきらめませんでした。

武器はただひとつ、その身だけでした。

けれど、善い者が力を貸しました。

神々が力を与えました。

少年は、誰もが失くした希望を胸に、戦い続けました。

少年は、ついに、魔の者をこの世から消し去ったのです。

それは遠い遠い昔から、どこの国でも語られて、どこの国でも一笑に付される、ただの伝説でした。

ただの人から生まれでて、闇が消えると同時に消え去る、ただの伝説でした。

夢幻の類とされ、目をつむった闇の中にしか存在できず、目を開ければ消えてしまう、そんな伝説でした。

絶望の中に希望を見だし、誰もがあきらめてもあきらめず、ただそれだけで地に倒れず、だからこそ誰にも存在を信じられない、そんな伝説でした。

それは物語の中の存在。それは子どもだけが讃える存在。

後になれば誰も信じず、後になれば誰もが笑い。ただ子どもだけが知っている。

そんな伝説でした。

少年は、伝説になったのです。

フェニス・R・リンク 6

そう、伝説になった。

少年は、^{アルカード}ただの人から生まれでて希望を胸に、戦い続けていた。

彼が戦いを挑んだのは、王の後継という立場だった。

思えば、殺されてもおかしくなかった妹を守るためでもあった。

愚かな王になるまいと、必死に知識を手に使っていた。

そうして手にした知識だけが、彼の武器だった。

打たれても倒れず、なぎ払われても立ち上がり、血を吐いてもあきらめなかった。

けれど、夢幻のように、今はもう瞑った目の奥にしか存在しない。

兄は言った。

優しく、自分が傷ついても他者を助け。そして、絶対に諦めない。

そんな者に自分になりたいと言った。

兄が守ろうとしたのは何だったのか。

見上げた窓から、北の空が見えた。

澄んだ青空。

その下には町並みが広がる。

兄の、守ろうとした国。

その広さと責任の重さに押しつぶされそうになる。

この時になって、ようやくフェニスには分かった。

兄がなりたいたといったその存在に、フェニスはならなくても良いと言った兄の気持ちが。

「北を切り開きし、偉大なる初代テルニダ王の時代——」

北の英雄の物語を唱える。

伝説の少年のように、自分には神の加護がないかもしれない。

けれども、それでも。何の力も、何のとりえもないとしても。

武器はただひとつ、この身だけだとしても。

打たれても倒れず、なぎ払われても立ち上がり、血を吐いてもあきらめない——そんな存在になろう。

フェニスは、兄になろうと思った。

後の歴史家は言う。

北方王国最初の女王——氷の女王と呼ばれ女神と同一視されたフ
エニス・R・リンクが最も先進的だったのは、何より異国の言語を
多く知っていた事だった。

翻訳という手間を省いてダイレクトにとどけられる情報が、彼女
の何よりの武器だった。

しかし、十七歳という成人を迎えて一年経ったばかりの女性が、
そんなに多くの言語を知っているはずもない、優秀な通訳がいたの
だろうという説もある。

確かに、彼女はそれまで何の役にも立たないといった教育も施
されなかったはずであり、この説はかなり有力だ。

何より、年齢を感じさせないほど、彼女は優秀であった。

周囲に彼女を支える有能な者が多かったのもあるだろう。

そういう意味では恵まれた女王だった。

だが、彼女は優秀すぎる。

これは他の王の偉業や、創作が年月を経て入ってしまったせいで
生まれた超人伝説の一種だと考えられる。

それは遠い遠い昔から、どこの国でも語られて、どこの国で

も一笑に付される、ただの伝説でした。

ただの人から生まれでて、闇が消えると同時に消え去る、ただの伝説でした。

夢幻の類とされ、目をつむった闇の中にしか存在できず、目を開ければ消えてしまふ、そんな伝説でした。

絶望の中に希望を見だし、誰もがあきらめてもあきらめず、ただそれだけで地に倒れず、だからこそ誰にも存在を信じられない、そんな伝説でした。

それは物語の中の存在。それは子どもだけが讃える存在。

後になれば誰も信じず、後になれば誰もが笑い。ただ子どもだけが知っている。

そんな伝説でした。

——彼女もまた、伝説になったのです。

カーラヴァス 1

世に生きるほとんどの人間は、なぜ自分が生まれたかを知らないという。

カーラヴァスは、自分がなぜ生まれたのかを知っていた。

生みの親であり、名づけの親でもあるベイス・スターシアが教えてくれたからだ。

「北方王国の現女王、フェニス・R・リンクの部屋に螺鈿の宝石箱オルゴールがある。それを取ってくるんだ」

それがカーラヴァスの存在意義だった。

生まれて、目を開けて、はじめて見た彼が、自分を「カーラヴァス」と呼んだ。

そして、自分がカーラヴァスの父親であり、カーラヴァスを造った者であると言った。

造った理由が、そのままカーラヴァスの存在理由だった。

カーラヴァスは、父の言うところによれば、人間とは違うらしい。

エリクシエル
比類なき薬——そう、一寝室に入った優秀なる熟達マキシテリウムを使って、硝子アイアルの小瓶から産まれた、私の忌まわしい子ども。腐敗から復活へ、ニグレド無を火から逃げるものを火に耐えるものにする事をした、私のすべての王者の術の精髓。アルベド

父はカーラヴァスをそう呼んだ。

父に説明を求めたが、理解できたのは父が愚かな西の連中が異端の術と呼ぶ方法でカーラヴァスを造り、そしてそれは決して異端などではなく、世界を構成する真実の術であるという事だけだった。

「……なぜ……オルゴール 宝石箱を、欲する……の、です……か？」

半分縫い付けられた口——そうしないと顎が外れてしまうからだ
が——を不自由に動かして、カーラヴァスが尋ねる。

「私を拒絶した者に思い知らせてやるのだ」

「……オルゴール 宝石箱で……それが、できる……のです……か？」

「そうだ。オルゴール 螺鈿の宝石箱には、力がある。物語という人々の記憶と感情を喰らい、溜め込み、想像を絶する力を内に秘めているのだ。愚かにも普通の人間共にはそれが分かん。愚か者には無用の長物。ならば私が手にして、世界を作り変えてやる！」

カーラヴァスにはよく分からなかった。

そう言ったら、父には「腐った脳を使ったからかもしれない」と言われた。

それでも一生懸命考えて、言った。

「……世界を、どう……作り変える……の、ですか？」

父は笑った。

「もちろん、私が愚かな人間共を排斥する世界にだ！ 馬鹿馬鹿しい人間共め！ 異端だと？ 私の能力の素晴らしさにも気付かずに愚かな！ 分からないものを切って捨てる事でしか保身のできない愚かな人類など滅びてしまうが良い！ 私がいれば十分だ。私が、新しい世界を創り上げる神になれば良い！」

やはり、カーラヴァスにはよく分からなかった。

「……………オルゴール 宝石箱が…………… あれば…………… 良い…………… のです…………… か？」

「そうだ。早く取って来い。私は氷の女神だか何だか知らんが、忌々しい結界に阻まれて中に行けぬのだ。お前は造られた者で人間ではないから通れるだろう」

そう言われた。

そして、カーラヴァスは言われた通りに、北方王国の宮殿に忍び込んだのである。

カーラヴァス 2

父の言った結界とやらは、感じる事すらできなかった。

父の言ったとおり、人間ではないカーラヴァスには効力のないものなのだろうか。

街を囲む三重の城壁を乗り越え、王宮の中に忍び込む。

高い壁も並外れた臂力じしりよくと恵まれた体格、そして尽きる事のない体力を持ち合わせたカーラヴァスにとっては、何の障害でもなかった。

体格に似合わぬ素早い動きで、松明の灯りの届かない場所を駆け抜ける。

そこは逆に闇が暗く、カーラヴァスと違い暗闇で物を見る能力の低い人間には、見つかる事はなかった。

今夜は満月であったが、雲が多く、月がほとんど隠された闇夜だった事も幸いした。

たどり着いたのは、果樹垣エスバリエに囲まれた沈床式庭園サンクン・ガーデンであった。

中央に噴水ファウンテンを配し、周囲を色々な形の花壇バルテールで覆い尽くす。

最奥に、東屋ガゼボがあった。

隅々まで人の手が入り、整然と整えられた庭園は、美しい鳥籠に見えた。

その最奥の東屋^{ガゼボ}から、人の声がしている。

紅い鞠、白い鞠、追いかけて、天高くまで

転がった先はおてんとうさまの鼻先で

白い光で鞠は弾かれ、次に行ったのは銀色の

冷たい冷たい、おつきさまのまんまえさ

西の童謡だった。

それが、パタンという何かの閉まる音と共に途切れる。

「そこに居るのは誰？」

聞こえたのは、先刻の歌を歌っていた男の声とは違う、老女の声だった。

「北の言葉は分からない？ 西ならば分かるかしら？ それとも、南？ 東かしら？ どの言葉でも良いわ。分かるかしら？」

その女性はゆっくりとして、それでいて威厳のある声で、あらゆる言語をたくみに使った。

「……北か西……の言葉なら……分かり、ます……」

カーラヴァスはそう答える。

父は、カーラヴァスに粗野な南の言葉と、父自身の知らない東の言葉を除き、西と北の言葉を教えてくれた。

「では北の言葉で話しましょう。貴方はどなた？ どちらからいらしたの？」

声だけのまま、老女は尋ねる。

「……俺は……カーラヴァス……と、言います。……貴女は、どなた……ですか？」

「わたくしは、フェニス・R・リンク。この国の女王よ」

あまりにあっさりとした名乗り様に、カーラヴァスは思わず思考を止める。

元々あまり血のめぐりのよくない頭では、北で最も権力のある女性^{ガゼボ}がひとりきりで東屋にいるなど考えられなかった。

「貴方は、どちらからいらしたの？」

女王がそう尋ねた。

その瞬間、偶然にも、雲が晴れた。

月明かりにカーラヴァスの姿が浮き上がる。

「……………」

父が醜悪だと言いつつ姿が、おそらく、女王の目に入ったのだろつ。

彼女が息を呑む声が聞こえた。

再び、月に雲がかかり、暗闇が戻った。

「こんな事を聞いてごめんなさいね。……貴方は、人間なの？」

女王は、ゆつくりと、動揺を押し殺した声で尋ねた。

「……いいえ……」

カーラヴァスは、そう答えた。

「そう。カーラヴァスといったわね。貴方は何故ここに来たの？」

女王の次の質問はこれだった。

カーラヴァスは驚いて、思わず問いかける。

「……俺を……恐ろしい……と、思わ……ないの……ですか……？」

「何故？」

女王は尋ねた。

カーラヴァスは答えられなかった。

「そうね、貴方は大きな体だし、腕も太くてとても力がありそうね。わたくしはただの老婆ですもの。貴方が襲ってきたらきつと逃げられないわ」

なら、どうして、と尋ねかかったカーラヴァスを制して、女王が続ける。

「でも貴方は襲ってこないわ。とても紳士的な侵入者ね」

悪戯っぽくそう言う。

「……でも……襲う……かも、知らない……」

「そうね、だとしたら貴方がそこにいる時点でわたくしの命は終わっているわ。そうと分かっているなら何を恐れる必要があるの?」

最後に、笑い声と共に付け加える。

「第一、襲うようなら襲うかもしれない、なんて言うはずがないわ」

「……俺は……父の……望みを……適えるために……ここに……来ました……」

ガゼボ
東屋の中は暗く、カーラヴァスの視力を持っても、女王の姿はよく見えない。

カーラヴァスは、なぜか女王の姿を目にしたいと思った。

「貴方のお父様の望みとは何かしら?」

「……………オルゴール 宝石箱……………螺鈿の、オルゴール 宝石箱を……………持つてくる……………事……………」

尋ねられるままに言う。

「あら、困ったわね。わたくしは持つて行つて欲しく無いわ」

女王がそう言うので、カーラヴァスの方こそ困ってしまった。

カーラヴァス 3

「……^{オルゴール}宝石箱……を……貴女も……必要……なので、す……か？」

「そうよ。^{オルゴール}この宝石箱はわたくしの支えなの」

そう言っ、女王が何かを持ち上げた。

それが^{オルゴール}宝石箱だろうかとカーラヴァスは考える。

「^{オルゴール}この宝石箱の中に、北の英雄の物語というのが入っているのよ。
この話を知っていて？」

女王がそう尋ねるのに、首を横に振る。

「あら、残念だ事。聞いてみて、わたくしの大好きなお話なのよ」

女王が言い終わるとほとんど同時に、蝶番の軋む音が聞こえた。

そしておもむろに、早口で音程の外れた声が聞こえる。

何を言っているかは分からない。

「この次からよ」

弦楽器の音が聞こえた。

次いで、男の声。

歌い上げるのは、伝説の物語だった。

ただの人の中から生まれ、何の力も持たない伝説であった。

ただ己の力のみで、ただその胸に希望を抱いて、伝説になった少年の物語であった。

誰ひとり信じず、ただ子どもだけが信じる、そんな伝説の物語だった。

「わたくしは、挫けそうになるとこの話を聞くの。聞くと、アルカードお兄様を思い出して、また頑張れるのよ」

「……あるかーど……お、にいさ……ま……？」

「わたくしのたった一人のお兄様よ。とても賢くて強い方だったの。わたくしの目標で、ずっと追いつきたかった人。そして、伝説になっちゃった人よ」

女王は声のトーンを落としてそう言った。

「……伝説……？」

意味が分からなかったので、そう尋ねる。

「亡くなってしまったの。わたくしが十六の時よ」

「……………」

何と言って言いか分からなくなって、カーラヴァスは黙り込む。

なぜこつという時に自分の頭は上手くまわってくれないのだろうか、
と思った。

女王は哀しんでいる。

それを慰めようにも、言葉ひとつ出てこないのである。

「アルカードお兄様が亡くなって、わたくしは女王になった。アル
カードお兄様は、この国を守ろうとなさったの」

女王が^{オルゴール}宝石箱を机に置く。

「お兄様はこの国を愛してらした。この国に住む人を、この国に根
付く文化を。そしてそれを何人の手からも守ろうとなさった。その
ための武器として、多くの知識を必要とされた」

女王が一步前に出る。

「わたくしは、そのお兄様の遺志を継ぎたい。お兄様の愛した国を。
お兄様の愛した人々を。お兄様の愛した文化を守りたい。お兄様の
ように、知識とこの身ひとつを武器にして」

女王がもう一步進み出る。

「でもわたくしは弱い。すぐに意志が揺らいでしまうわ。幾度挫け
てもわたくしが立ち直れたのは^{オルゴール}宝石箱のおかげ。^{オルゴール}宝石箱の物語を聞
いて、百度挫けても百一度立ち上がる。千度挫けても、千一度立
ち上がるの。^{オルゴール}宝石箱がわたくしの希望。胸に掲げた折れない旗印。
わたくしを包む黄金の翼。すべての闇を切り裂く銀の剣」

もう女王は、上半身しか東屋カゼボの影に沈んでいない。

「わたくしには宝^{オルゴール}石箱が必要な。わたくしが死んだらどうしても構わないわ。だから、今だけは、持って行かずに済ませる訳には行かないかしら」

そう言つて、女王が最後の一步を踏み出した。

女王の姿があらわになる。

どこを締める事もないハイウエストの服は、寝巻きなのだろう。

普段ならば貴婦人方と同じようにきちんと整っているであろう髪は、今はゆるやかに背に下りている。

女官たちが丁寧に櫛を入れるその髪は、見事なまでの白銀だった。ところどころに残っている亜麻色が、彼女の本当の髪色を知らせた。

こちらを見据える瞳は青。

ゆるやかに弧を描く眉と、白く、彫りの深い皮膚。

そして、彼女の歩んだ人生そのもののように、深く深く、全身に皺が刻まれていた。

カーラヴァスはめぐりの悪い頭で必死に考えた。

「……その……生き方は……辛く、ないですか……」

「辛いわ」

女王が答える。

「……その……生き方は……苦しく、ないですか……」

「苦しいわ」

それから、女王は右手を胸にあてた。

「私は弱い。だから^{オルゴール}宝石箱が必要なのよ」

カーラヴァスは、頭を殴られたように目の前がぐらぐらした。

——この強い女^{ひと}は、初めから強かった訳ではないのだ。

そうあると強く強く願って、ひたすら努力をして、挫けそうな^{オルゴール}気持ちを^{オルゴール}宝石箱で慰めて、それでも苦しみながら、それでも逃げ出さずに、ここに立っている女^{ひと}なのだ。

カーラヴァス 4

カーラヴァスが何も言えずにいと、女王は東屋^{ガゼボ}を出て、カーラヴァスに近づいてきた。

暗い中でもあまり近づけば嫌でも女王に顔を見られてしまう。

そう思つてカーラヴァスが咄嗟に後退る。

それに女王が不思議そうな顔をした。

「何故、逃げるの？」

「……俺は……醜い……から……」

それが女王の「何故」の問いの答えになるかはわからなかったが、そう答えた。

女王が笑つ。

「外見が何？ 何がそれをそれたらしめるかを決めるのは外見ではないわ」

カーラヴァスには、意味がよくわからなかった。

「ほら、わたくしも貴方と同じ。しわくちやの醜いおばあさんだわ」

カーラヴァスが何も言えずにいと、女王は手が届くほど近くに歩いてきた。

「やっぱり、同じね。貴方は縫い付けてあるだけ」

全然違う、と思った。

フェニスの方が綺麗だと思った。

凜とした雰囲気。

柔らかい表情。

鋭い眼差し。

そして、ちつとも年を取っている風に見えなかった。

不意に、先刻女王の言った「何がそれをそれたらしめるかを決めるのは外見ではない」という言葉の意味が分かった気がした。

女王の言葉通り、女王の外見はしわくちやの老婆だったが、その心は老婆ではなかった。

その瞳は老婆ではなかった。

彼女は王だった。

ただひとりの臣下も連れず、王の証たる王冠も被ってはいなかったが、己の良心に誠実で、己の心に黄金の冠を掲げた、真実の王だった。

たとえばその身にひとかけらの権力すら持たずとも、伝説レジェンダーのように、

その存在こそが王だった。

その^{からだ}からは、「氷の」とあだ名されたような冷やややかさは感じない。

ただそこにあるのは思いやりあふれる優しさと、思慮深いまなざしだけだった。

それは一朝一夕に身につくものではなく、彼女の支払った苦難の代価を思わせる、深みを垣間見せるまなざしだった。

「どうかしたのかしら？」

フェニスが尋ねる。カーラヴァスはその問いに答えなかった。代わりにこう言った。

「……^{オルゴール}宝石箱は……要り……ません……」

フェニスが少し目を見開く。

「わたくしは嬉しいけれど、貴方がお父様に怒られるような事はないの？」

怒られるだけで済まないだろう事は予測がついている。

少しばかり足りないカーラヴァスの頭でも、すぐに分かる事だ。

造られたカーラヴァスが、創造主に敵うはずもない。

「……大丈夫……です……」

大丈夫だ。

カーラヴァスは、自分も伝説になれると思った。

随分と狭量な伝説ではあったが、フェニスからオルゴール宝石箱を取り上げる事だけにはできないと思った。

そんな事をしたら、フェニスの伝説が終わってしまう。

じつとこちらを見ていたフェニスが、口を開く。

「それで、貴方はどうするの？」

「……父の……所に……帰ります……」

「ここに居ても良いのよ？」

それはとても心地良い誘惑だった。

戦う事なく、楽園のような世界で、静かに暮らす。

心を折りたくなる誘いだった。

けれども、フェニスのためにそれは出来ないと思った。

だから、首を横に振る。

「……もう、……帰り……ます……」

「そう」

「……はい……。……フェニス。さようなら……」

フェニスが顔をあげた。こちらを見る。

息が詰まった。

「また会いましょう。カーラヴァス」

もう適わないだろうと思った。

「……はい……。また……。会いましょう……」

そう、答えた。

それは、死を覚悟した者が、愛する者の為につく優しい嘘だった。

それは、自分の為でなく、他者を想ってつく悲しい嘘だった。

そしてカーラヴァスが彼女に告げた、最後の言葉だった。

カーラヴァス 5

ベイス・スターシアの住処は、西国の果ての果て、最も北に近い、不毛の地にあった。

誰ひとりとして踏み込まない奥地である。

カーラヴァスが帰った時、ベイスは喜んで彼を迎えた。

「よく帰ってきたなカーラヴァス！」

「……ただいま……戻り——」

「それより！」

カーラヴァスが言い切らないうちにベイスが声をあげる。

「オルゴール宝石箱だ！ オルゴール宝石箱はどこだ？ 今頃、氷の女王も文字通り凍り付いてるだろうよ！」

哄笑をあげるベイスを見つめながら、静かにカーラヴァスは告げる。

「オルゴール宝石箱は……持って……きません……でした……」

しん、と沈黙が落ちた。実験台に置かれたフラスコの中の液体から、ぷくりと空気が浮き上がり、はじける。

その音が殊更に響いた。

「なぜだ」

冷ややかに、ベースが尋ねる。

「お前でも結界を通れなかったか」

「……いいえ……通れま——」

「では、衛兵に見つかったか。お前の力ならば簡単に蹴散らせるはずだろう」

今度は質問がふたつあったので、カーラヴァスは少し考えた。

「……確かに……簡単に……殺せ……ます……。……でも、違い……ます……衛兵には……見つかって……ませ——」

「ならなぜだ！ オルゴール 宝石箱の在り処が分からなかったか。そんなもの女王を締め上げてはかせる！ 氷の女王なぞと言われても所詮女だ。お前の醜い顔を見れば怯えて何でもしゃべりだすだろう！」

「……フェニスは……怯え……ません……でした……。……オルゴール 宝石箱は……俺の……意志で……持って……きません……でした……」

「——意志！」

ベースが叫ぶ。

「意志だと？」

吐き棄てるように続けた。

「そんなものがお前に存在するものか！」

「……あり……ます……俺は——」

「錯覚だ！ 女王に何を吹き込まれた。お前も愚かな人間と同じ事を言うのか。私が間違っている！」

ヒステリックにベースが声をあげる。

「……俺は……自分の……意志で……フェニスを……護ります……」

そのために、ここに帰ってきたのだ。

もう、二度と、ベースが、フェニスに手を出さないように。

フェニスが人生を全うする、あと数年か、十数年をひねり出すために。

カーラヴァスは思った。

そのために、自分は喜んで伝説になろうと。

意志を持ち、創造主に逆らい、運命に抗う。

夢幻のような伝説になろうと。

「——カーラヴァス——」

ベイスが高圧的に怒鳴りつける。

カーラヴァスは平気だった。

人形のような自分も、意志を持てる事が分かった。

人を尊敬して、愛して、そのために何かができる事が分かった。

他人は自分を愚かと呼ぶかもしれない。

そんな者はいなかったと、語らないかもしれない。

それでも構わなかった。

ベイスが何事かを早口で言った途端に、全身が千切れそうになった。

みしみしと体が軋む。

痛覚は元よりない。ただ、胸が痛いだけだった。

フェニスに二度と会えない事が悲しいだけだった。

手を延ばす。

ベイスの表情が驚愕と、そして恐怖に変わる。

「……俺は……貴方も……嫌いじゃ……なかった……」

ただ、護るべきものが違っただけ。

手を、延ばして、つかむ。

ベイスの右の――効き手の――腕。

ろくに力の入らない指先に、全神経を集中する。

力を籠めると、バターか何かのように、それが裂ける。

もう聞こえない耳に、ベイスの悲鳴が聞こえた気がした。

視界が狭まり、暗くなる。

最期に、カーラヴァスは考える。

――ごめんなさい。

――でも、これで、時間が稼げる。

ベイス・スターシア 1

ベイス・スターシアは、西方王国の貴族の息子として生まれた。

嫡男ではない。第三子である。

慣例に従って、軍に入ったが、ベイスは不思議の力に興味があった。

明るい日向で訓練に励むのが好きな次兄と違い、書庫で頁を繰るのが好きだったのである。

魔術師だの錬金術師だのと呼ばれた人々は、ベイスがそれらを学び始めた時には、既にインチキすれの妖しげなものだと思われていた。

実際に力ある者も、強引な理論でインチキと決め付けられた。

種のない不思議を、種があると決め付け、それを実証する方法をひねり出した。

種が見つからないと、今はまだ発見されていない方法で種が見つかるはずだと難癖をつけた。

拍車をかけたのは、貴族だけでなく民衆の間にも広まりはじめた一神教である。

唯一の神を拝み、他のものはすべて異端と廃した。

本当に力のあつた人々も、異端として槍玉にあげられ、インチキをしていた人々と、ひとくくりにされた。

異端とされた者は、酷い拷問にあつた。

例えば水に長い間、頭をつけられる。力があるならばそれでも生きていられると言つのである。

そこで死ねば異端ではない、と分かる。

生きていれば異端として処刑される。

力があるうがなかるうが、裁きを下す側は一切考慮しなかった。

ベイスは、本当に力のあつた稀有な例であつた。

だが、異端として偽りを吐いたと責められた。

父が、我が一門から異端の徒を出すわけにはいかない、と金を積んだ。

ベイスは拷問もされず、一言「今まで私の言つた事はすべて偽りでした」と言えば許されると言われた。

ベイスは死にたくなかった。

だから言われた通り、言つた。

悔しくて、そんな事を言わせた奴らが憎くて仕方なかった。

なぜ、自分がこんな屈辱的な目にあわなければならないのかと思
った。

いつか、報復してやろうと思った。

作り上げられた正義にあぐらをかいて、他者を断罪して喜んでい
る連中に、罰を与えるのは自分だと思った。

だが、家に帰ったベイスを待っていたのは牢獄だった。

父が罵った。我が家から異端を出すなぞ考えられない、と。

母が嘆いた。私に恥をかかせようと言うのか、と。

長兄が怒鳴りつけた。馬鹿な事をして俺の出世に差し支えたらど
うする、と。

次兄が嘲笑^{わら}った。上手い事やってりゃ一生閉じ込められる事もな
かったのに、と。

姉が眉をひそめた。下賤な子、と。

妹が困った顔をした。

お兄ちゃんともう口を聞いちゃいけないんだって、と。

ベイスの世界は、暗い石堀と、灯り取りと、食事を差し入れにや
ってくる侍女だけになった。

すべてを憎いと思った。

自分を否定する世間が。

自分を邪魔者にする家族が。

それを許す召使いたちが。

それを受諾する制度が。

それを許容する世界が。

食事を差し入れにきた侍女を、隠し持ったナイフで脅して、牢を抜け出す。

そのまま屋敷を抜け出して、安全な場所についてから、家族に呪いをかけた。

ベイスの血を媒介とした呪いである。

呪詛を吐く。

呪われてしまえ。穢れた血筋よ、絶えてしまえ。

死に絶えてしまえ。

その通りになった。

だが、世界への復讐はまだ成っていない。

ベイスはその方法をもとめて、世界中をさまよう事になる。

ベイス・スターシア 2

ベイスがその噂を聞いたのは、ベイスが家族に呪いをかけてから大分経っていたが、ベイスはまだ復讐を諦めていなかった。

——曰く、北方王国の女王、フェニス・R・リンクの元には凄まじい力を持った呪具がある。

噂を追いかけるうちに、それが言葉の力を籠める螺鈿の宝石箱だと分かった。

その力は天を割り、地を砕き、世界を根本から変えてしまうほどの力なのだという。

その事をベイスに教えてくれた魔術師は続けてこう言った。

「あの宝石箱の力は、もう誰にも扱えない。氷の女王が馬鹿な事に使わないように願うのみだ」

それを聞いてベイスは嘲笑った。愚かしいと思ったのである。

そうだ——お前如きには扱えないかもしれないが、私は違う！

むやみに力を恐れるのは馬鹿のする事だと思った。力は操れてこそである。手に余る力などない。やりようはいくらでもある。

ベイスは噂の宝石箱とやらを手に入れてやろうと、北方王国に入った。が、王都に入ろうとした瞬間に、結界に弾かれたのである。

氷の女王——現女王でなく、守護の女神の結界であった。

それは取りも直さず、ベイスの力が本物である証明であった。

しかし、ベイスは己に力があると思って疑った事がない。

ただ拒絶されたように感じた。

「お前もか！」

人目も気にせず、そう叫んだ。

叫んで、そして、そのまま西へと戻った。

彼を真つ先に拒絶した西国は嫌いだったが、西の文献でなくば読めなかったからである——もっとも、後に東を除く言語を習得したが――。

彼は西の果てに、居をかまえた。

洞窟に家具と実験器具を持ち込んだだけの貧相な住まいではあったが、北の永久凍土に近く、頻繁に吹雪くこの場所では、洞窟で地下深くにもぐってしまふほうが好都合ではあった。

洞窟を掘ったのは、ベイスの手足となって働いた小人間たちである。
ホームンクルス

彼らは力はあるが、思考はなかった。

ただ命じられた事しかできない上に、ひとつの事しか覚えていら

れない、低能な生物であった。

ベイスが次にした事は、己に忠実な子どもを作る事であった。

ホムンクルス
小人間の技術を応用し、魔術を加え、未だかつて誰も作った事のない生き物を作り上げた。

それは、力を持ち、己で思考し、いくつもの事を命じても大丈夫な——それでいて、創造主に逆らわない程度に頭の働きの鈍い生き物だった。

ベイスはそれにカーラヴァスと名をつけた。

創造物ならば、結界を越えられると思ったのである。

実際に、結界は越えられた。

しかし、カーラヴァスはオルゴール宝石箱を取っては来なかった。

北の女王に感化され、悪意ある言葉を吹き込まれ、自身が意思を持っているなどと勘違いをし、創造主に——逆らった！

ベイスはカーラヴァスに罰を与えたが、ベイス自身のダメージも大きかった。

肩口から抉られた腕は、使いものにならなくなった。ホムンクルス
小人間に止血を命じ、命は取り留めたが、オルゴール宝石箱を手に入れる計画は先延ばしにするより仕方なくなった。

ベイス自身は決して認めようとしなかったが、創造物にさえ拒絶

された事に、心がささくれ立った。

だから、殊更に北の女王を憎んだ。

あいつのせいだ――。

そう思う事で気を紛らわせた。

ベイスが溜飲を下げたのは、それから数年して、フェニスが死んでからの事である。

フェニスは後継として自らの産んだ子を指名したが、またここで純潔がどうこうと言い出す愚かな貴族が現れたのだ。

ベイスには、実に好都合な事に。

フェニスの戴冠を偽りと言い、新たな王を立てるのはどうかと言
い出した者がいた。

それに反対し、フェニスの遺言通り、その子どもを次王に据えよ
うと反論する者もいた。

いつかの再現のように、会議はもめた。

その間に、女神の結界の緩んだ王都に入り込んだベイスは、ま
んと宝石箱オルゴールを手にしたのである。

それから、ベイスが望みを適えるまでに長く時間がかかった。

オルゴール
宝石箱から力を引き出す方法を調べ、それに必要な物を集めるのに時間がかかったのである。

そして、それ以上にベイスが熱中し、熱心に努めたのは、己の右腕を再生する事だった。

自分に『欠陥』があるなど、ベイスには到底認められなかったのである。

カーラヴアスを造り上げた技術の応用で、何とか腕を取り戻すと、ベイスは世界を滅ぼす準備を始めた。

世界を滅亡させる力が己の手元にあると思うと、嬉しくて仕方なかった。

ようやく世界に報復ができる、と思ったのである。

巨大な魔方陣を床に書き、世界を滅ぼす呪文を作り上げ、その力の源として^{オルゴール}宝石箱を中央に据えた。

準備は完璧だった。

だが——その企みは失敗したのである。

「なぜだ！」

その絶叫が、ベイス・スターシアがこの世界に残した最後の言葉だった。

^{オルゴール}宝石箱は留め金と螺子を弾き飛ばし、世界を滅ぼす力を逆流させ

たのである。

はじめに作られた螺子ではなかった。

はじめに作られた留め金ではなかった。

後付けで、何の力も持たないそれらは、オルゴール宝石箱の力を抑えるには役者不足だったのである。

世界を滅ぼし、何一つない無の世界にしてしまわずだった力はすべてベイスに向かった。

ベイスはオルゴール宝石箱に飲み込まれ、世界と世界の壁を越える——界渡りを果たしてしまったのである。

ベイス・スターシア 3

気づけば、ベイスは狭苦しい部屋にいた。

部屋の壁を覆い隠すように、うずたかく様々なガラクタが雑然と置かれている。

無造作に積み上げられたそれらは、オルゴール宝石箱の取り込んだ物語たちだった。

ベイスは呆然とそれらを見つめる。

——ここはオルゴール宝石箱の中か？

そう思ったのもつかの間。

カラン、とドアベルが鳴り、誰かが部屋の中に入ってきた。

見た事のない肌と、髪と、目の色だった。

聞いた事のない言葉を話していた。

しかし、意味は分かるのだった。

その人物は——いや、人ではないのかもしれないが——ガラクタを抱えていた。

紛う事なきガラクタであった。

ひび割れた壺である。

ただし、本人はそれを抱えている事に気づいていないようだった。

「ここは——どこでしょう？」

こっちが聞きたい、とベイスは思った。

「俺は——」

しばらく黙っていたかと思うと、彼は突然身の上話を始めた。

ベイスにとってはどうでも良い身の上話だった。

うんざりしたが、遮るのも面倒くさく、そのまま話すに任せた。

聞き流していると、話がぱったりと止んだ。

気づくと、ベイスの方が壺を持っていた。

話し終わってすっきりした顔をしたその男は、もう何も持っていなかった。

「ああ、何か気分がすっきりした。何を考えていたんだっけ？」

などと独り言を言うと、部屋からさっさと出て行った。

不意に、ベイスは気づく。

この壺は今の男が置いていった物語だ——。

間違いなく、この場所は、オルゴール宝石箱の中なのであった。

それから長い長い時間が過ぎた。

少なくともベイスにはそう思えた。

ここでは腹も減らなかった。

眠ろうとしても眠れなかった。

死を望みもした。

しかし、どんな事をしても死ねなかった。

痛みもなかった。

体には傷ひとつつかなかった。

ここは時の止まった空間であった。

ある日、ベイスは何気なくガラクタを手にとった。

その中でも、傷や妙なところのない綺麗な物を選んだ。

はじめに手に取ったのは、模型船であった。中にあったのは、赤くはつしゃくがん髪赤眼の海の民の娘の物語だった。

次に手に取ったのは、リダールだった。中にあったのは、薬師の青年の物語だった。

次に手に取ったのは、仙女の羽衣だった。中にあったのは、自鳴^{オルゴ}琴職人の娘になって彼を慰めつつ、婚約者を待った仙女の物語だった。

次に手に取ったのは、東国の貨幣だった。中にあったのは、無からはじめてすべてを手にした商人の物語だった。

次に手に取ったのは、ティアラだった。中にあったのは、尊敬する兄を失い、重い重圧を押し付けられながらも、運命を飲み込んで伝説になった少女の物語だった。

次に手に取ったのは、骸骨だった。中にあったのは、創造主を裏切ってまでひとりの老女を守ろうとした創造物の物語だった。

最後に手に取ったのは、ちぎれた腕だった。

中にあったのは、ベイス自身の物語だった。

それから長い長い時間が過ぎた。

少なくともベイスにはそう思えた。

長い時間が経って、はじめてベイスは涙がこぼれた。

自分は今まで何をしてきたのだろうかと思った。

もう何ひとつ戻らなくなっではじめて、彼は己の作った創造物の気持ちがあった。

それから、また長い時間が経った。

時折誰かがガラクタを持って来ては、それを置いていった。

覗くと、それは大抵辛い記憶だった。

忘れたくて、忘れたくて仕方ない。

それでも忘れられずに苦しむような記憶だった。

宝石箱^{オルゴール}が、なぜこの世に生まれたのか、その意味がベースには分かった気がした。

ガラクタの中でも極めつけの薄汚く、今にも砕けちりそうなボロ^{オルゴール}の自鳴琴の中を見たのである。

中にあつたのは、自鳴琴^{オルゴール}職人の記憶であつた。

暖かい家族。

愛しい娘。

そして、それをすべて無に帰した天災。

彼の前に現れた救いの仙女。

彼女と過ごした日々。

それでいて、ずっとついてまわった彼女が偽者だという記憶。

真実の家族を失った痛み。

それらを吐露する場所がほしかった、という気持ち。

結局彼は、オルゴール宝石箱にその記憶を籠めはしなかった。

けれど、その感情の断片が、オルゴール宝石箱のうちに残ったのである。

だからこそ、オルゴール宝石箱の中は、その自鳴琴オルゴール職人の家と同じ間取りかたちをしていた。

元いた世界を脱して、オルゴール宝石箱は初めて、最初に望まれた通りの力を手にしたのであった。

ベイス・スターシア 4

時間のないそんな世界で、ベイスは長い長い時を過ごした。

あまりにそれは長く、ベイスは時々、虚空に向かって自分の物語を呟いた。

けれど、オルゴール宝石箱に取り込まれたベイスの、悲しい記憶が消える事はなかった。

また、長い長い時が過ぎた。

ある日、奇妙な服を着た少女がやってきた。

年の頃は十四、五歳程度だろうか。

「……あの、」

彼女は恐る恐る、と言った風に声をかける。

手には大切そうに何かの破片を持っていた。

経験則で行くならば、それはとても大切な人を失った悲しい記憶だ。

「……あの、シヨウ・ウィンドウに飾ってある箱なんですけど……」

が、少女が次に発したのはそんな言葉だった。

ショウ・ウィンドウなぞ、この部屋にはない。

箱とは螺鈿の^{オルゴール}宝石箱の事だろうか？

外から入ってきた者が螺鈿の^{オルゴール}宝石箱の事を知っている事は今までにない事だったが、他に該当する箱を思いつかない。

これは今までにないパターンだ。

思わず少女の方を見る。

しかし、何の変哲もないただの少女だった。

「どうやって入った」

どうもこの部屋に来るには、人によって入り方が違うらしい。

最も多いのは「寝ていて気付いたら」だった。

そして、夢の中で辛い記憶を置いていくのだろう。

ベイスにしてみれば、ただ訊ねただけだったが少女はそうは思わなかったようだ。

一瞬で顔を真っ赤にして、あたふたと弁明を始める。

「すみません！ 私『^{テンドー・キー}優しさの手がかり』が売っているのかどうかを聞きたくて……！」

「……テンドー・キー？」

鸚鵡返しに聞き返す。

何の話だかよく分からなかった。

「あの……つまり、ショウ・ウィンドウの箱を……私、何でも名前をつけちゃう癖があつて、その、それで……」

真っ赤になつてもごもごと言いつける。

それを聞いて驚いた。

「名前を、つけたのか？」

声に出す。

——名前を、つけた！

今まで誰にも名を明かさず、誰の下にも下らずにいた、この力ある箱に！

こんな何でもない、ただの平凡な少女がどうしてそんな偉業を成し遂げるとは誰が考えようか！

思つて、ベイスは思い直す。

いや、偉業を成し遂げるのはいつもただの人だった。

どこにでもいる、何の力もない、平凡な人だった。

「——なら、これはお前に渡る運命なのだろう」

運命。

いや、そうではないのかもしれない。

少なくとも、運や天命で定められたものではない。

少女自身が、自らの力で引き寄せたものだ。

立ち上がって、螺鈿の^{オルゴール}宝石箱を手取る。

ここは^{オルゴール}宝石箱の中。

どこにしようか、思うだけで^{オルゴール}宝石箱を手にする。

「これは螺鈿の^{オルゴール}宝石箱だ」

「オルゴール？」

手渡すと、少女は食い入るように上蓋を見つめる。

「その模様が気に入ったか？」

訊ねるが答えはない。

そうだろう。

彼の世界にいた時よりも多くの物語を呑みこんで、^{オルゴール}宝石箱の力は増している。

「その模様は永遠の螺旋を象徴している」

永遠に、力を籠める紋様を。

「はじまりもおわりもなく、そこから出る方法はない」

あるいは、あの世界そのものが、この箱の中にあつたのかも知れない。

そう思うが、確かめる術はない。

「内に秘めた力は、正しい方法でしか使えない。いや、箱はただきつかけでしかないのかもしれない」

きつかけだ。

この箱を手にした者には、みな伝説になるだけの素質があつた。

いや、伝説になったのだ。

それは遠い遠い昔から、どこの国でも語られて、どこの国でも一笑に付される、ただの伝説。

ただの人から生まれでて、闇が消えると同時に消え去る。

夢幻の類とされ、目をつむった闇の中にしか存在できず、目を開ければ消えてしまう。

絶望の中に希望を見いだし、誰もがあきらめてもあきらめず、た

だそれだけで地に倒れず、だからこそ誰にも存在を信じられない、そんな伝説。

それは物語の中の存在。

それは子どもだけが讃える存在。

後になれば誰も信じず、後になれば誰もが笑い。

ただ子どもだけが知っている。

そんな伝説――。

ベイス自身もそうなれたらだろうか？

いや、物語を語るオルゴール宝石箱をという装置に組み込まれたベイス自身は、語られる対象ではないのかもしれない。

「これで帰れるのか、いや、消えてなくなるのか。いずれにしろ、自分で招いた事態だ」

呟く。

どちらになるのか分からない。

どちらにせよ、もう、前も見えない。

ただ、真っ白な光が――。

おわり 1

く優しさの手がかりテンダー・キ

耳元で音楽が鳴る。

——リダールの音だろうか？

ぼんやりとした頭で藤花は考える。

——リダールかもしれない。だって、こんなに聞き覚えがあるのだ。次のメロディ・ラインも分かる。次の音は——。

「違う！」

そこまで考えて、ようやく藤花は飛び起きた。

藤花はリダールなどという楽器を知らない。

鳴っていたのは携帯電話だった。

聞き覚えがあるのも道理である。

知らない間に眠ってしまっていたらしい。

慌てて開いた携帯のディスプレイに表示されているのは、巴の名前。

「はいっ！」

急いで、通話ボタンを押す。

『あ、もしもし藤花？ 留守番電話サービスにつながったから鳴ってるの気付かなかったのかと思った』

「うん。ごめん……寝てたみたい……」

言いながら時計を見る。

時刻は四時半。

時計が止まっているのだろうか。

全然時間が経っていない。

「……ねえ、巴。今、時間四時半であってる？」

『えっと……うん。四時半だよ』

時間はあっていた。

眠っていたと思しき時間は、ほんの一瞬の事だったらしい。

「それにしちゃ密度の濃い夢だったけど……」

『は？ 何言ってるの？』

無意識の眩きに律儀に反応する巴。

「あ、ごめんごめん、で何？」

『買出し結構早く終わってさ。今ならいつものミスドで約束のハニ
ーディップおごっちゃうぞ。来る？』

「本当？ 行く行く！」

それから付け加える。

「私も巴に話したい事があるの」

『優しさの手がかり』の事を。そして、『優しさの手がかり』の
語った物語の事を。

巴は表情まで想像できるような、にやにやした声で聞いてくる。

『えー何？ 好きな人でもできた？』

「残念でした。違います」

『なーんだ』

答えると、巴は心底残念そうな声を出した。

もちろん冗談なのは分かっている。

「じゃあ今からミスド行くね」

『うん、待ってる』

言って通話を切る。

『テンドー・キー優しさの手がかり』を見た。

あんなに引き込まれたはずの上蓋が陳腐に見えた。

はじまりもおわりもないと思った螺旋には、ちゃんとはじまりもおわりもあつた。

緻密に計算されたと思った紋様は、無造作に置かれているだけだった。

妖しく煌いていたと思った螺鈿は、蛍光灯を反射しているだけだった。

円環かと、螺旋かと、あるいは大極図であるかと思った模様も、よく見ればただの円の連なりだった。

確かに力あると思ったソレは、ただの箱だった。

試しに蓋を開けてみる。

何の音もしなかった。

ただ中に敷き詰められた紅天鷲絨ベージュローネだけが変わらない。

静かに蓋を閉じる。

留め金は壊れていた。

ネジもなかった。

『テンドー・キやさの手がかり』は、物語を語り終えたその瞬間に、一切の力を失っていた。

『テンドー・キやさの手がかり』を鞆に入れて、藤花は家を出た。

おわり 2

いつも行くミストの自動ドアをくぐると、巴が待っていました、とばかりに両手を振る。

軽く振り返しつつ、巴の確保した席に急いだ。

店内は寄り道を楽しむ学生で溢れ返っている。

学校の近くの店な事もあり、私服の方が少ないくらいだ。

着がえていなくて良かった、と藤花は思った。

下手に私服だと、巴は制服なのに浮きそうだ。

「お待たせ」

「うん。だいぶ待った」

席に駆け寄ると、大げさに巴が言う。

「それは失礼いたしました」

笑いながら巴の向かいに座る。

藤花の席には既に、約束のハニーデップと、いつも藤花の頼むアイスコーヒーが置かれている。

ガムシロップとミルクまで既に入っている。

至れり尽くせりである。

——もつとも、ミルクがふたつも入っていると見ると、単に暇だから遊んでいただけかもしれない。

「で、話って？」

「うん。実はね——」

ズバリ切り出す巴に、言って話し出す。

巴と分かれてから、図書館に行こうと思った事。

途中で、不思議な骨董品屋を見つけた事。

不気味な主人に螺鈿の宝石箱オルゴールを渡された事。

家に帰って『優しさの手がかりテンドー・キー』を開けたら、不思議な声が物語を語りだした事。

赤髪赤眼の海の民の娘の物語しやへはしやくかん。

薬師の青年の物語。

自鳴琴職人の娘になって彼を慰めつつ、婚約者を待った仙女の物語オルゴール。

無からはじめてすべてを手にした商人の物語。

尊敬する兄を失い、重い重圧を押し付けられながらも、運命を飲み込んで伝説になった少女の物語。

創造主を裏切ってまでひとりの老女を守ろうとした創造物の物語。

世界を滅ぼそうとして、失敗し、界を渡り^{オルゴール}宝石箱をに閉じ込められた哀れな魔術師の物語。

最後に、藤花が『^{テンドー・キー}優しさの手がかり』を手にしたところで目が覚めた事。

話す間、名づけ癖という妙な癖を親友に告げる事の抵抗はなかった。

そんな事よりも話を聞いて欲しかった。

そして、その感想が欲しかった。

一体、どんな感想が欲しいのかは分からなかったけれど。

「で、コレがその『^{テンドー・キー}優しさの手がかり』」

そう言っ^{テンドー・キー}て鞆から『優しさの手がかり』を取り出す。

「ふーん。まあ綺麗だけど、藤花が言っ^{テンドー・キー}てたほど凄くないね。何かそこらの土産物屋で売っ^{テンドー・キー}てそう」

それは藤花も感じていた事だった。

「寝ちゃって、目が覚めたら何ていうか……凄みがなくなっちゃっ

てたんだよね……」

夢幻の類のように、目をつむった闇の中にしか存在せず、目を開ければ消えてしまう。

それはまるで物語の中の存在。

『テンドー・キ優しいの手がかり』自体も、物語に語られたただの伝説だったかのように。

「ネジはないんだっけ。蓋、開けてもいい？」

「うん。でも音しないよ」

「そうなの？」

「うん」

巴が蓋を開ける。音はしなかった。

「ふうん。藤花には悪いけどちょっと信じられないなあ」

巴が言うのに、そりゃそうだろう、と内心想う。

藤花自身だって、いきなり巴からこんな話をされたらひく。

「ただし、藤花に創作の才能があるならね」

「——は？」

「こんな長つたらしい話、一朝一夕に思いついたら文豪になれるって。しかもこんなネジ取った^{オルゴール}宝石箱まで用意してさ」

にやりと巴が笑う。

「こんなに手間かけてあたしを騙す理由が分かんないもん。逆説的に信じてやろう」

無駄に偉そうにそう言った。

「……あーありがと」

「うわ、気のないセリフ！」

「いや……あんまり信じてもらえらと思ってなくて……」

「あんまり信じてないけどね。癪じゃない」

腕組みした巴の言葉に眉をひそめる。

「……癪って？」

「えーつと北の英雄の話の最後の……それは物語の中だけの存在……？ とかいうところ」

「ああ……」

それは物語の中の存在。それは子どもだけが讃える存在。後になれば誰も信じず、後になれば誰もが笑い。ただ子どもだけが知っている。

そんな伝説でした。

……つてところ?。」

くり返し語ったその部分を言う。

「そう、それ!。」

巴が漫画のような動作でぽん、と手のひらを拳で叩いた。

「癪でしょ? 信じないとあたしがまるで子どもじゃないみたいで
こちらとまだ十四歳だっつーの」

それから、食べ終わったふたり分のトレーを重ねながら、巴が立ち上がった。

「ま、信じる信じないはともかくその骨董品屋行ってみようよ。で、
その主人に『アンタ、ベース・スターシア?』って聞けば良いでしょ?。」

藤花は少し考える。

もう一度あの店主に会いたいと思っていたのは事実だ。

思ってうなずく。

そういう事になった。

おわり 3

じき夕日が沈む。

大分薄暗くなっていたが巴が「その『硝子の小道』を通って行く」と言ったので、ふたりは『硝子の小道』を歩いていった。

夕闇と木陰のせいで、足元はかなりおぼつかない。

「足元氣をつけてね、巴。あと少しだから」

「てか藤花……アンタいつもこんな足場の悪い所歩いてたの!？」

「……う、うん」

「ヘアピンカーブの坂もキツイと思ってたけど、こっちのがきついわ。藤花えらすぎ」

なぜそういう思考回路になるのかはよく分からなかったが、一応ほめられているらしい。

「あ、あそこ。あのあたりに店が——」

『硝子の小道』を抜けた瞬間、藤花が店のあった辺りを指差す。

骨董品屋は、『硝子の小道』を抜けた先の向かい側にあった。

そのはずだった。

そこには、何もなかった。

民家さえ。

ただ、フェンスのはりめぐらされた土地があるだけだった。

「……ねー藤花。なんか宮崎駿の世界みたいになってきたんですけど」

「違うもん、絶対トトロはいたんだもん！　って？」

巴の声に、思わずそう答える。

実際かなりそんな気分だった。

今まで確かだと思っていた事柄が、手指をすり抜けていくように、藤花は不安になった。

『優しさの手がかり』テンダー・キは確かに手元にある。

しかしそれを受け取った骨董品屋はない。

『優しさの手がかり』テンダー・キも、眠る前のような不思議な感じはしない。

たとえ藤花がもう一度この『優しさの手がかり』テンダー・キをショウ・ウィンドウの中に見つけても、店内に入ろうとは思わないに違いない。

この『優しさの手がかり』テンダー・キは、もしかしてあずさの私物で、何かの間違いで藤花の部屋にあったものかもしれない。

もしかして、骨董品屋に行ったとそう思った事自体が夢かもしれない。

「……ごめん、巴」

「何？　嘘だったの？」

「……何かそうかもって思えてきた」

藤花が言う間に、巴は道を渡って、フェンスに触れる。

がしゃがしゃと揺さぶった。

当たり前だが——本物だった。

日が暮れる。

影がどんどん長く濃くなっていく。

心細くなった。

確かに何かを受け取ったと思った物語は、自分の夢だったのだろうか。

「ねえ、藤花？」

巴が言う。

「なあに」

「何であたしにその話をしたの？」

何でだろうか。

分からない。

聞いて欲しかった。

ただ聞いて、感想が欲しかった。

でもそれは一体何のためだったのだろうか。

夢に違いないと断じて欲しかったのか。

夢ではないという保証が欲しかったのか。

でもだとしたら、それはなぜだろう。

どうして夢か現実かはつきりさせたかったのだろうか。

「ねえ、藤花？」

巴が言う。

「なあに」

「あたしは本当でも良いと思ってるよ」

「は？」

思わず変な声をあげる。

「例の伝説が気に入ったから」

それが巴の理由だった。

「ああ、うん」

よく分からない声をあげる。

その間に一生懸命考えた。

「私も、好きかも」

好きかもしれない。

そんな伝説に、自分もなりたいと思った。

その気持ちは、たとえすべてが偽りでも、本当だと思った。

おわり 4

藤花が『テンドー・キ優しさの手がかり』を手にしてから、一週間が経った。

巴はというと、突然「コンクールに出す絵の構想が固まった」と言い出したきり、その絵にかかりきりになっている。

巴は授業中以外、すべて絵を描いていた。

食事ですら、絵を描く片手間だった。

まだ『テンドー・キ優しさの手がかり』に関する話をしたりなかった藤花には残念だったが、描きかけの絵を見られるのを嫌がる巴についてまわって一方的に話す事もできない。

巴が絵に気を取られている間、藤花は何度も何度も、物語を思い出していた。

どうしたわけか、藤花には『テンドー・キ優しさの手がかり』の語った物語が一字一句正確に思い出せた。

そして思い出すたびに、強く思う。

物語の女王がそう誓ったように。

何の力も、何のとりえもないとしても。

武器はただひとつ、この身だけだとしても。

打たれても倒れず、なぎ払われても立ち上がり、血を吐いてもあきらめない——そんな存在になろう。

ぼんやりと空を眺めながら、そんな事を考えていた放課後。

「藤花！ 何ぼーつとしてるの！ 中二組、長野藤花！」

いつかのように、可愛いと称するには少々甲高すぎる大声で巴が藤花を呼んだ。

「ちゃんと聞いてるよ、巴」

いつかのように答える。

「ちょっと来て！」

いつかと違ったのは、巴が問答無用に藤花の手を取って、走り出した事だ。

「え！？ ちょっと何、巴？」

引きずられるように走りながら、藤花が尋ねる。

「絵、完成したの！ 藤花に一番に見て欲しくて！」

巴が言う。

よく見れば、その手のあちこちに油絵の具がついている。

制服の前にエプロンもしたままである。

「完成したの？ おめでとう！」

息継ぎの合間に言う。

巴はろくに聞いてもいないようだった。

扉の開いたままの美術室に飛び込む。

窓際にイーゼルがある。

縦に置かれたキャンバスの裏面が見えていた。

「はい、」

息を切らせながら、巴がそう促す。

近寄って、キャンバスを覗き込んだ。

中央にあるのは木製らしき箱。

蓋が開いていて、中に赤い布が敷き詰められているのが分かる。

誰かの手がソレを掲げていた。

周囲を取り巻くのは七人の人物。

褐色の肌をした赤髪赤眼あかみ せがんの少女。

金髪の青年。

黒髪の仙女――。

全員を確認するまでもなかった。

実際には見た事もない人々だったが、誰だか分かった。

巴が何を描いたのかが分かった。

「巴……」

「どう？ 似てる？ 藤花の話を絵にしてみたんだけど。直すところない？」

おそろおそろ、といった風に巴が尋ねる。

「うん」

そう言うだけなのに、とても力が要った。

「あのね、巴」

「なあに？」

「何かすっごく嬉しい。ありがとう」

藤花が言う。

笑い泣きみたいな表情になってしまった。

それに応えて、巴がにこりと微笑む。

その絵は、後日のコンクールで大賞を取った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5365b/>

螺鈿の宝石箱

2010年10月21日22時19分発行